

応用心理学の クロスポート



Vol. 04

2011. December

●特集

日本応用心理学会第78回大会報告

多領域の心理学のクロスロードに必要なこと

—研究の作法 時にはアクセントを—

心理学は、直接には見えない「心」をいかにして見えるようとするか、さらに、見えないものを互いに結びつけ、その行き着く先までを考えようとする科学ですから、やっかいです。今や、心理学の研究は多彩に展開されています。そしてこの日本応用心理学会では、実践・応用を旨とする研究もその前提となる基礎研究も行われています。

このような多彩な研究者が集う学会だからこそ、1つの学会としての活動を維持するために考えておかなければならぬことがあるのではないかでしょうか。それは、それぞれの研究の意義、方法、結果の取り出し方などについて、如何に不足なくわかってもらえるかです。話の通じる仲間ということは互いを理解しやすく、支援も得られて楽しいものです。一方、異質な者に対しては理解のコストがかかり、煩わしさもあるので、敬遠しがちです。学会活動も同じです。ついつい発表者も受け手もわかりやすい仲間を期待してしまいます。

試みとして、2つのことが考えられます。1つは、個別の発表だけではなく、関連するテーマでありながら、背景や研究の仕方の異なるいくつかの研究を括って、セッションを作ることです。そうすると、否応なく、討論というコミュニケーションを通じて共通項が出来てくるのではないかでしょうか。この試みには、討論する時間を長く取ることが肝要です。多くのシンポジウムでは、大抵は時間が十分になく、複数の個別の発表がなされただけに終わることが少なくありません。上記のような方針を堅持して、融合を意図するセッションは、本学会としては意義ある試みになるのではないかでしょうか。

2つめは、多様な研究の方法を学び直す機会を作ることです。心理学の研究方法の基本はある程度共有されているものと思いますが、次第に折衷的な方法や、新たな方法も生まれています。また、研究テーマによっては、用いられている方法が特化されて独特になっているものがあるように思われます。このことは、データの分析方法についても言えるのではないかでしょうか。なお、それぞれの研究方法、分析方法には、利点と限界は付きものです。望ましいのは複数の方法を組み合わせて用いることです。また、ワン・ショットの研究ではなく、自ら確認的な追跡を行うことが肝要だと思います。学会大会の試みとして、研究方法、分析方法について具体的な研究を題材にしながら議論する機会があってもいいのではないかと思います。付け加えたいことは近年、データ収集、属性の記述が簡略化されていることへの危惧です。何時、何処でどのように得られたのか、詳しく記述されていないと、その結果についての一般化について躊躇してしまうことになります。

時代とともに研究の対象も方法も拡大しつつあります。多様な関心を持つ会員を凝集する本学会としての活動に、時にこのようなアクセントが必要ではないでしょうか。

大坊郁夫

だいぼう・いくお●北海道大学大学院文学研究科博士課程退学。大阪大学大学院人間科学研究科教授。対人コミュニケーション（主として非言語行動）と社会的スキル・トレーニングをwell-being実現のため、研究を行っている。編著書：『しぐさのコミュニケーション』（単著、サイエンス社）、『魅力の心理学』（単著、ポーラ文化研究所）、『化粧行動の社会心理学』（編著、北大路書房）、『社会的スキル向上のための対人コミュニケーション』（編著、ナカニシヤ出版）、『関係とコミュニケーション』（共編著、ひつじ書房）等。翻訳書：『パーソナルな関係の社会心理学』（共監訳、北大路書房）等。



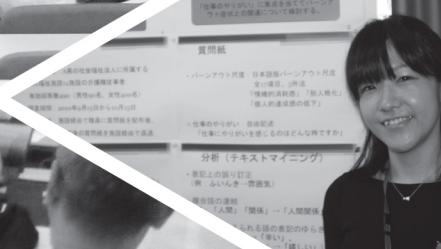
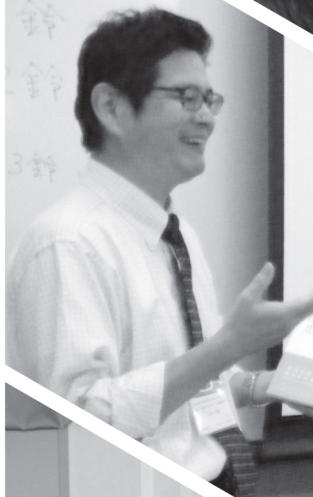
CONTENTS

卷頭言	多領域の心理学のクロスロードに必要なこと	大坊郁夫	1
特集	日本応用心理学会 第78回大会報告		3
大会実行委員長からの報告 日本応用心理学会第78回大会を終えて			
一東日本の復興と学会の発展を祈念— 内藤哲雄 4			
参加院生からの報告 ① 今後の研究への励みに 石岡綾香 8			
② 心理学の多様性と応用性を学んだ大会 小川拓郎 9			
③ 応用心理学のおもしろさを再認識した2日間 長澤里絵 10			
本誌広報委員からの報告 笑顔と熱意に包まれた大会 加藤博己・蜂屋 真 11			
応用心理学 未来への展望			
「人間は環境のなかで生きている」ことを忘れずに 山岡 淳 12			
応用心理学を駆使して社会に貢献 稲毛教子 13			
ホープ登場 クロスロードの星			
⑫高井秀明 [日本体育大学] 14	⑬蓮花のぞみ [大阪大学] 16		
⑭飯嶋 慧 [東洋大学] 18			
東日本大震災 被災地からの報告 青葉山の避難生活 阿部恒之 20			
大学探訪 研究室におじゃましました 白梅学園大学子ども学部 金子尚弘 22			
職場探訪 (独)自動車事故対策機構 名古屋主管支所 神作 博 25			
CROSSROAD ESSAY 私と応用心理学 ④			
応用心理学と社会貢献 坂本由紀子 28			
海外最新事情 第6回国際心理療法会議参加報告 林潔 30			
BOOK REVIEW 本を出しました 32			
廣瀬清人『生活の質を高める教育と学習』／久能由弥『相談援助実習・実習指導』／谷口幸一『生涯スポーツの心理学』／林幸範『幼稚園・保育所・児童福祉施設実習ガイド』／井手正吾『わかりやすいMMPI活用ハンドブック』／濱保人『京都人が北海道に住みついたワケ』／桐生正幸『犯罪者プロファイリングは犯人をどう追いつめるか』／永田良昭『心理学とは何なのか』			
心理学から見たおすすめDVD紹介 『ヒロシマナガサキ』 杉田明宏 36			
特別寄稿 F・E・フィードラーの履歴、業績および思い出(その2) 白樺三四郎 37			
応用心理士の現場			
応用力、展開力を兼ね備えた応用心理士に 名張淑子 40			
◆日本応用心理学会認定「応用心理士」資格認定申請のご案内 43			
常任理事会通信			
◆機関誌編集委員会からのお知らせ 44	◆日本応用心理学会入会案内(申込書) 45		
◆編集後記 46	◆原稿募集 47		



特集

日本応用心理学会 第78回大会



日本応用心理学会第78回大会を終えて —東日本の復興と学会の発展を祈念—

はじめに

2011年3月11日午後2時46分、マグニチュード9.0の巨大地震が東北地方太平洋沖で発生し、直後の津波による被害も加わり、宮城県、岩手県、福島県の東北地方東海岸に未曾有の大災害が発生しました。その後の余震も含めて、東日本大震災の被害は関東地方にまで及んでいます。さらに福島県では、原子力発電所に二次的事故が発生しました。放出される放射線は事故直後に比べて激減していますが、雨水などで放射性物質が降下蓄積されたために、原発から60km、100kmを超える地域でも高い放射線を示すスポットが見つかっています。その後、世界各地で地震や洪水による災害が発生しています。被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。

第78回大会は、東日本大震災の発生から丁度半年後の9月10日(土)～11日(日)に、信州大学松本キャンパスの人文学部で開催させていただきました。大都市圏から離れた地方都市での開催ということで、発表者数、参加者が少なくなることが予測されました。このため、ベテランの先生方に、ご本人の参加だけでなく、大学院生を含む若手研究者を勧誘していただくようにお願いしました。学会研修会は例年通りの2件でしたが、特別講演が1件、大会企画シンポジウムが2件と、昨年よりも規模が縮小されており、発表原稿の締め切り直前まで不安が募りました。しかしながら結果は、おかげさまで、自主企画ワークショップ9件、口頭発表25件、ポスター発表83件(合計117件)となり、参加者も300名近くで、地方大会としては大盛会でした。信州大学人文学部校舎の発表会場、ホテルブエナビスタでの懇親会も好評でした。開催関係者一同、嬉しいいっぱいです。これら

はすべて皆様のご支援によるもので、心より感謝申し上げます。

大会の概要

1) 大会準備

信州大学人文学部での本学会会員は大会委員長の内藤1名だけです。常任理事会の執行部から信州大学での開催を要請された時点で、社会心理学教室の同僚2名に大会開催について相談し、協力をお願いしました。しかし開催を承諾していただいたものの、同僚の長谷川孝治先生(後に大会事務局長に就任)と清水健司先生(後に大会副事務局長に就任)は、日本応用心理学会の実際活動については知らないし、大会の規模や形式についても、全く知りませんでした。そこで事前に、お二人に大会運営の実務担当をお願いすることを承諾していただいてから、経費は内藤の研究費からとし、昨年の京都での第77回大会に2泊3日の出張で参加していただきました。ついで、京都大会のすぐ後に、理事会懇親会や大会時懇親会の会場について、ネットや、同僚等から情報を収集し、訪問して現場を確認して、有力候補先では経費を抑えていただく交渉をし、比較して利用先を決定しました。また一昨年から人文学部の事務方と相談し、人文学部校舎を会場とした場合の借上費免除を希望して、日程について打ち合わせが済んでいましたが、再度確認しました。

同僚の長谷川・清水先生と相談し、大会の受付や論文集作成などの事務作業については、一昨年の九州大学での大会までと同じく、国際文献印刷社に依頼することとしました。そこで、内藤が昨年暮れに国際文献印刷社を訪問し、発注する予定と経費の削減について交渉をしました。なお、2月から始まった大会通信、大会案内、発表申込、プログラムなどについては、3人で

作業分担しながら、入念にチェックしました。会議を開いて何度も打ち合わせながら、発表者の部屋割り、学部学生スタッフのためのマニュアル作成は清水先生、パネルのレンタルや物品の購入とホテル等の交渉と全体調整は長谷川先生が、国際文献との交渉や弁当等の手配等を内藤が主として分担しました。経費は徹底して節減することとし、ネットでの情報比較と購入も利用しました。大会前日は、学生を招集して、マニュアルの説明とリハーサルが行われました。



大会受付

2) 特別講演会

特別講演は、東日本大震災による地震、津波と原発事故による放射線の被害を基に企画されたものです。講演者の首藤由紀さんは、社会安全研究所の主催者で、この研究所では、地震、火山、津波、原子力の防災についての研究と、安全教育を業務としています。東北大で心理学を専攻され、早稲田大学大学院人間科学研究科を修了された首藤さんは、実務教育だけでなく、応用心理学の観点からの話題提供ができる適材です。お父様の首藤伸夫先生は、東北大名誉教授で津波研究の第一人者です。東日本大震災について語る最適任者として、大規模、広域における、津波防災対策、原子力防災対策、複合災害の話題について、実用に供するお話をしていただきました。



特別講演会での首藤由紀氏

3) 大会企画シンポジウム

[高齢者のモビリティ安全支援の在り方について]

交通事故で亡くなった方の半数以上が65歳以上で、その半数が歩行中に亡くなっています。高齢者はますます増加しており、高齢者のなかで比率の高い女性に対しての移動の安全支援が重要な課題となっています。大会開催地である長野県は高齢者の比率が高いことで知られています。そこでこれまでのように男性中心の研究者が討論するのではなく、企画と司会、話題提供者も、指定討論者もすべて女性でのシンポジウムとしました。欧米での実践教育や研究が盛んな歩行者の問題も取り上げられ、女性ならではの視点からの発言がありました。今後のさらなる発展が期待できます。

[最近の若者の社会・他者との関わりの脆弱と内閉]

最近の若者にみられる現象として、超能力や心霊現象など超常現象への信奉、恋愛に無関心であるとか消極的な草食型の出現、自分の好きなことなら取り組める非定型うつ病など、社会・他者との関わりの脆弱や内閉とみなせる現象が取り上げられることが多くなっています。話題提供は、超常信奉は「非合理的思考」と言えるのか、恋愛に消極的な若者の理由とその影響、蔓延する「隠れナルシスト」と、多岐にわたり異質でかみ合わないという印象を拭えませんでした。これらを見事に整理しましたのが指定討論者の相馬先生です。全体を繋ぐより深いレベルでの心性や仕組み、社会的背景についての議論が、今後さらに発展していくことが期待されます。



大会企画シンポジウムの様子

4) ワークショップ、口頭発表、ポスター発表

後続の新聞報道の記事にも現れていますよう

に、自主企画ワークショップ、口頭発表、ポスター発表のいずれにおいても、身近な課題が取り上げられており、その内容は多岐に渡っています。応用心理学会らしい特色が顕著で、写真でもご覧いただけるように、若手の参加者も多く、活発な意見交換がみられました。



ポスター発表の様子

5) 研修会

例年のように、大会の開催日のそれぞれに研修会が開かれました。第1日目は「A：独居高齢者への社会的支援」で、司会が河内和直先生、講演者が大橋信夫先生でした。第2日目は「B: QOLとスピリチュアリティの評価法」で、司会は伊坂裕子先生、講演者は木村友昭先生でした。大会日程の都合で、両日とも自主企画ワークショップと重なって、一方にしか参加できない方もいらしたのが残念でした。

6) 懇親会

懇親会は、大会1日目の夕方からホテルブエナビスタで開かれました。大会会場に残っていた人はホテルのバスで移動しました。料理やお酒については、途中で数回追加することができ、好評でした。また、懇親会では、昨年度から開始された大会発表優秀賞(昨年度分)の表彰が、盛大な拍手とともに行われました。来年の第79回大会には、本年度の優秀発表者が表彰されます。若手の受賞もあり、若手研究者の励みになっています。



昨年度大会発表優秀賞表彰

7) 理事会、常任理事会

理事会は大会前日の9月9日(金)の午後3時から、人文学部の会議室で開催され、夕方からは懇親会を準備しました。懇親会場も大好評であったのは嬉しいことです。

常任理事会は大会2日目に開かれました。活発な議論が続いていましたが、無事に(何とか?)特別講演会が始まる頃には終了しました。

新聞報道

諏訪東京理科大学の田中佑子先生の手配により、大会初日に信濃毎日新聞と長野日報の取材があり、いずれも大会2日目(9月11日)の朝刊に掲載されました。

[信濃毎日新聞記事]

心理学から社会問題解決探る：研究者ら身近なテーマで発表 信大松本キャンパス：日本応用心理学会の第78回大会は10日、松本市の信大松本キャンパスで2日間の日程で始まった。全国の若手研究者らが、血液型による性格判断や地域防犯など、生活に密着したテーマで研究成果を発表。約300人が集まり、心理学の観点から社会の具体的問題を探った。

道路交通での高齢者の安全確保を考えるシンポジウムでは、交通心理の研究者が高齢運転者を対象にした調査結果などを発表。無事故のタクシードライバーはいつも同じ時間に同じ長さの休憩を取っていることなどが紹介された。企画・司会を務めた日本ヒューマンファクター研究所(東京)垣本由起子顧問は「こうした研究成果を社会に発信していくことが今後の課題」と話していた。

若者の、社会や他者との関わりをテーマにしたシンポジウムもあり、恋愛に消極的な「草食系」と積極的な「肉食系」に二極化する傾向を指摘する報告などが出た。

11日午後1時から、「東日本大震災から学ぶ～応用心理学への期待を込めて」と題して、災害心理学が専門の社会安全研究所(東京)の首藤由紀所長が特別講演する。特別講演のみ一般の聴講が可能。

[長野日報記事]

日本応用心理学会第78回大会は10日、全国から専門家200人余りが参加して信州大学人文学部(松本市)で2日間の日程で始まった。教育、医療福祉、産業文化ほか多分野の課題と関わりを持つ応用心理学について、シンポジウムやワークショップを通じて研究成果の発信と意見交換を行っている。

応用心理学は、基本的な心理法則を社会発展や問題解決に役立てるための学問。領域の細分化が進んでおり、大会では時代に即したバラエティ豊かな課題が取り上げられる。今回は東日本大震災を踏まえた防災や心のケア、高齢者交通安全の支援といったテーマも組み込んだ。

初日のワークショップでは、欧米で盛んな学校での「紛争解決教育」の可能性を検討。教員が裁決をせず、子ども同士で対立の原因究明や平和解決を導く手法が紹介され、参加者からは「相手の出方を待つ日本人特有の姿勢にも配慮して対処法を考えると、より教育効果が得られる」などの意見が出ていた。

同学会の森下高治理事長は「身近な課題について心理学の知見を用いて貢献するのがわれわれの役割。机上にとどまらず社会へフィードバックできる取り組みを増やし、市民の関心も促したい」と話していた。最終日の11日は、社会安全研究所の首藤由紀所長による特別講演「東日本大震災から学ぶ」(午後1時)を一般公開する。(小林達治)

*長野日報では、「多岐にわたるテーマで意見交換している日本応用心理学会大会=信大人文学部のポスター発表会場」の写真も掲載されています。

おわりに

大会の開催は実務作業の負担が大きいだけでなく、大会が終了してみないと黒字になるのか赤字になるのかの予測がつかない。大会委員長は、大赤字を引き受ける覚悟がないと任務を遂行できないでしょう。円滑に進めるには、関係する多くの人々の協力が必要になります。これ

までの大会委員長の多くが不安を抱えながら開催してきたのだと思います。

非会員でありながら実務を取り仕切ってくださった、事務局長の長谷川先生、副事務局長の清水先生の尽力なしには、大会を開催できませんでした。大幅な赤字を覚悟しての開催でしたが、赤字にはならず無事に終わりました。信州大学人文学部の心理学教室と社会心理学教室は学生数が少なく、十分なおもてなしはできなかったと思いますが、精一杯務めさせていただきました。人文学部長の渡邊秀夫先生、大会実行委員でプログラムや論文集の表紙のデザインを引き受けくださった菊池 聰先生、当日の雑務を引き受けくださった実行委員の今井 章先生、高瀬弘樹先生、湯田彰夫先生、石井房枝先生、石橋里美先生に感謝。さまざまな形でバックアップしてくださった人文学部事務方の皆様、ありがとうございました。

大会開催日の4日前に、長年勤務した信州大学人文学部の研究室から、書籍を詰めた段ボール140個以上を引っ越し用の4トン車で福島学院大学に送りました。大会終了直後には、3泊4日で本の片付けに福島に出かけました。大会を開催した9月末には、信州大学から最後の有給休暇をいただいて福島に通いました。9月末で信州大学を退職し、10月3日に福島学院大学で辞令交付を受けました。10月からは福島に移り住み、担当は社会心理学から臨床心理学に変わり、心理臨床の実務に就いています。大会が開かれたのは昨年もっと遠い昔のように感じ始めていますが、新研究室の片付けはまだ終わっていません。



ないとう・てつお●大学院時代までの主専攻は実験社会心理学。信州大学医療技術短期大学部では心理学と臨床心理学を担当。信州大学の人文学部社会心理学小講座に異動し、臨床心理学と社会心理学の接点となるPAC分析を開発。大会終了翌月の10月からは、福島学院大学福祉学部及び大学院臨床心理学研究科で臨床心理学を担当。転任先の福島学院大学にて

今後の研究への励みに

このたび、信州大学で行われた日本応用心理学会第78回大会にポスター発表で参加させて頂きました。そして前年度大会の発表にたいしての大会発表賞を頂く、といった大変幸運な体験もさせて頂きました。今回は私の大会参加体験を一部でありますので、紹介できればと思います。

応用心理学会での発表は今回で2回目だったので、私は大変緊張しやすい性格のようで、昨年の京都大学での場合と同じように、発表時間が近づくにつれて不安が募るばかりでした。私は『虚偽検出検査における返答に及ぼす質問形式の影響』といったテーマで発表をしました。しかし、今回の大会では同じ非行・犯罪の領域で「虚偽検出」を扱ったポスター発表がなかったので、発表を見に来てくれる人がいなかつたらどうしようかと悩みました。そんな心配をよそに拙い発表ではありました。実際には多くの先生に聴いて頂くことができました。質疑と応答の緊張のなかで、気がつくとあっという間に時間が過ぎていきました。そして、他の発表者から多くのご意見やアドバイスを頂きました。特に、私が研究している「虚偽検出」という領域は、犯罪捜査に実際に使われているものです。今回の発表を見に来て頂いた先生方のなかには、科学捜査研究所に勤務されている方もいらっしゃり、実務場面ではどのような研究が求められており、私の研究がどのように貢献できるものなのかといったことを、改めて考えさせられました。

大会2日間を通しての印象は、いろいろな領域の研究発表があり、いずれも興味深いものばかりというものでした。また長野県の気候は東京の蒸し暑さとは違い、大会参加中はとても快適に会場をまわることができました。自分の研究領域の発表はもちろんのこと、他分野の発表を聴いたとき、自分の知らない視点からのものの考え方など学ぶ

ことが多く、学会参加の意義を再認識しました。

そして、この大会で一番印象に残ったことは初日の夜に行われた懇親会でした。

というのも、この懇親会で行われた昨年度大会における大会発表賞に私たちの研究が選ばれ、壇上にあがり表彰を受けることになったからです。私は前年度の大会において多くの素晴らしい発表をしておりましたので、自分がこの賞に選ばれたことを知った時には大変驚きました。私の場合、恥ずかしながらこの歳になるまで、賞を頂くといった経験がなく、今回の受賞の経験は本当に嬉しく、私たちの研究を選んで票を入れて下さった方々、そして、一緒に研究を進めて下さった先生方に感謝の気持ちでいっぱいです。また、このような賞を授与されたことで、今後もいっそう頑張ろう、という励みになりました。

今改めて大会参加を振り返り原稿を書いてみると、今回の大会がどんなに有意義な場であったか、多くを学んだ2日間であったかが思い出されます。これからも益々若い研究者が応用心理学会の場で集えることを期待しています。最後に日本応用心理学会のさらなる発展を希望しています。



いしおか・あやか ● 1986年埼玉県生まれ。2008年帝京大学文学部卒業。2010年駒澤大学大学院人文科学研究科心理学専攻修士課程修了。2011年現在、同専攻博士後期課程に在学中。研究内容は虚偽検出検査における質問および返答に関する影響の検討。社会に貢献できる研究をしていきたいと考えている。



大会発表賞受賞

心理学の多様性と応用性を学んだ大会

この度は、日本応用心理学会第78回大会に参加させて頂きました。また大会を運営していた実行委員とスタッフに、感謝の意を申し上げます。

まず、大会の印象は「多領域に分かれて多くの先生方が口頭発表やポスター発表を行っていること」「2011年3月11日、日本を大きく震撼させた東日本大震災の特別講演があること」「高齢者や若者の問題をテーマにしたシンポジウムがあること」「応用心理学という分野だからこそ聴くことができる自主企画ワークショップがあること」これら興味深い研究が多くなされており、私はどれに参加するかと迷ってしまうほど、驚嘆しておりました。そのなかでも自主企画ワークショップ「スポーツの心理を追及する—応用心理学としての実践—」は、大変興味を抱いたワークショップとなりました。その理由としては、心理学がスポーツという実践場面にどのように応用され、トップアスリートの競技力の向上と実力発揮に貢献できるのかということに焦点を当てていたからです。実際に、スポーツ心理学コンサルタントの2名の先生によるトップアスリートに対する心理サポート内容と、アテネ五輪・北京五輪女子200m背泳ぎ銅メダリストの中村礼子先生による2大会で銅メダルを獲得した過程についてのお話を聞くことができたのは大変貴重な経験となりました。心理サポート内容や中村礼子先生自身のメンタルマネジメントや競技サポートの体制について聴くことで、選手に対するアプローチの仕方や選手自身が試合前や練習の際に、コーチやトレーナーに対してどのような心理サポートを臨んでいるのかなどを知ることができ、大変勉強になりました。

次にポスター発表では、私はスポーツ選手の怪我について心理学的観点から研究し、発表致しました。私は学部生時代にトレーナー活動をしていくなかで、怪我をした選手の心理的内面

や心理サポートなどの研究をしてみたいと思っていました。大学院に進学してからの半年間、この学会のために準備をしていたということもあります。

発表前日から大変緊張していました。しかし発表時間になり、そこで多くの先生方と怪我に対する考え方やアプローチの仕方などの意見交換をすることができたため、緊張していることは忘れてしまい、時間はあっという間に過ぎてしまいました。今回、ポスター発表において、研究に対しての新しい視点や他領域のポスター発表を拝見させて頂いたことで心理学がさまざまな領域に対して応用しうる分野であることなど、多くのことを学びました。

懇親会では、豪華な食事とお酒を堪能することができました。また、参加者の先生方や他大学の大学院生とそれぞれの研究している内容についてお話しすることができますと、とても楽しい時間を過ごすことができました。

来年の北海道大会に向けて、今回の発表を通して得た多くの収穫をいかし、少しでも良い研究発表ができるように、スポーツ選手における怪我について心理学的観点から研究し、進めていきたいと思います。



おがわ・たくろう ● 1987年大阪府生まれ。2011年日本体育大学体育学部体育学科を卒業。同年、日本体育大学大学院体育科学研究科博士前期課程に進学。同大学ではトレーナー研究会に所属し、活動のなかでスポーツ選手の怪我に関する深層心理について興味を持つようになる。現在、トレーナー研究会の学生アドバイザリースタッフとして活動する。



懇親会の様子

応用心理学のおもしろさを再認識した2日間

私自身、今大会が2度目のポスター発表であり、大会への参加、発表にまだ慣れであるために、緊張して大会初日をスタートさせました。しかしその緊張を吹き飛ばしてくれたのは、ポスター発表に足を運んでくださった諸先生方でした。

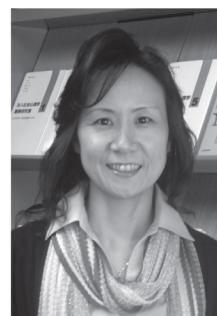
応用心理学会の魅力のひとつに、多岐にわたる領域の先生方が参加、発表していらっしゃることが挙げられます。そのため、普段のゼミなどでの意見交換では得られない視点からご意見をいただけることもあります。大変勉強になり、刺激にもなります。

今回のポスター発表では、看護の領域から発表を見に来てくれた先生方がいらっしゃいました。将来医療の現場で働く看護士志望の学生さんに向けて、職場での人間関係、特に患者さんへの接し方など、心理学の立場からどのように教育、指導をしていくべきかといった内容にまで話が及びました。私は「怒り喚起とその表出」について研究をしておりましたが、これは多くの方にとって、職場や日常生活のなかで、他者との円滑な人間関係を築くうえで重要な問題であるということを再度認識し、この研究のおもしろさを改めて感じることができました。

多くの先生方の発表を拝見させていただいて感じたことは、研究の結果を論文のなかだけに留めて置かずに、私たちの日々の生活、そして学校や職場などの現場でその結果を活用していくために、積極的に発信していく必要があるということでした。そしてこの、「実生活に結果を還元していくこと」こそが、応用心理学の醍醐味なのではないでしょうか。自分の発表だけでなく、他の先生方の発表を拝見させていただいた折にも、多くの意見交換をさせていただき、そのことを通して応用心理学のおもしろさを再認識させていただいたことが、今回の大会での大きな収穫でした。

自分の研究発表もこの大会に参加する目的のひとつではあります。その他、「血液型による性格判断を信じる人がなぜ多いのだろうか」のワークショップに参加させていただくことも楽しみのひとつになっております。今年で4回目となったこのワークショップへは、第2回目より参加させていただいております。毎年大きな笑いに包まれて進められるこのワークショップですが、私たちの「なぜ」にわかりやすく答えていただける場でもあります。「人の性格を4つに分類することには無理がある」と考えながら、心の片隅で「それでもやはり血液型と性格の間には何かあるかも」と考えてしまう人の心理を考えるこのワークショップは、血液型という、身近でわかりやすい題材を通して、「心理学が、日常生活における疑問について考える際の重要なカギとなる」ということを楽しく伝えてくれているように感じました。

今大会での発表や、お会いした方々との交流を通じ、これからも楽しく研究を進めていきたいと思いました。このような機会を与えていただき、ありがとうございました。



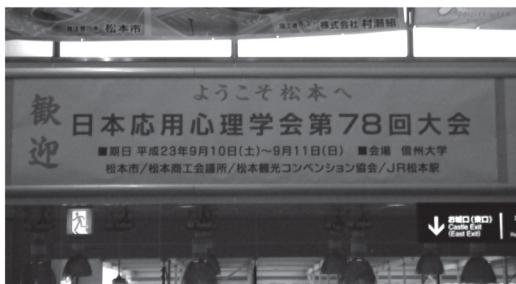
ながさわ・りえ ● 2003年ボストンのノースイースタン大学心理学部を卒業。その後同校の社会心理学系研究室にてリサーチアシスタントを勤める。帰国後、立正大学大学院心理学研究科にて修士課程応用心理学を専攻し、2010年に修了。同年4月より博士後期課程に在籍。現在は怒りの喚起とその表出をテーマに研究を行っている。



ポスター発表の様子

笑顔と熱意に包まれた大会

2日間を通して天気に恵まれ、朝晩には涼しさを感じるさわやかな気候のなか、信州大学での大会は盛大に行われました。JR 松本駅の改札を出て、すぐに、



(歓迎 ようこそ松本へ 日本応用心理学会第78回大会 松本市／松本商工会議所／松本観光コンベンション協会／JR松本駅)

との大きな横断幕が目に飛び込んできました。会場では、観光地の各種パンフレットのみならず、歴史・文化・芸術・各施設への「無料共通招待券」や「夜りみち GUIDE MAP 共通クーポン サービス券」が配られました。現存するなかでは日本最古の五重六階の天守閣を持つ、国宝松本城や、日本銀行松本支店を有する松本市が、街を挙げて大会を歓迎してくださっているのが、ひしひしと伝わってきました。大会委員長の内藤哲雄先生のご尽力に感謝申し上げます。

さて、今大会のプログラムでは、口頭発表、ポスター発表の他に、アップ・ツー・デートなテーマである首藤由紀氏による特別講演会「東日本大震災から学ぶ」や、2つの大会企画シンポジウム「高齢者のモビリティ安全支援の在り方について」、「最近の若者の社会・他者との関わりの脆弱と内閉」と、9つもの自主企画ワークショップ、2つの研修会「独居高齢者への社会的支援」、「QOLとスピリチュアリティの評価法」が開かれ、どの会場も盛況でした。

特に、2つの大会企画シンポジウムは、大会総会と同じ大会場で行われ、聴衆が後方の席まで座る程の大盛況で、ときに笑いを交えながら

の話題提供、討論に、聴衆は熱心に耳を傾けていました。また、ポスター発表会場でも、通行が困難なほど人が出入りし、昨年の京都大学での大会より始まった「優秀大会発表賞」への投票が、今大会でも行われ、プレゼンテーションにも熱がこもっていたように思われました。また、学会懇親会では、昨年度の「優秀大会発表賞」受賞者4組の表彰式も行われました。次年度以降も、本企画により、大会発表を盛り上げて頂ければと思います。



かとう・ひろき●駒澤大学文学部
はぢや・しん●流通科学大学サービス産業学部

応用心理学 未来への展望

本学会の名誉会員に応用心理学との出会い、応用心理学への期待などについて語っていただきました。

「人間は環境のなかで生きている」ことを忘れずに

山岡 淳

日本応用心理学会との出会い

1945年終戦、疎開先から母校湘南中学4年に復学したところ、戦地から帰国された先生方は専ら最上学年の5年の突貫授業に集中、4年以下の生徒はほとんど自習でした。「高校受験者は出席扱いとする」といわれ、名古屋在住の親しい親戚を訪ねるために八高理科の飛び級受験を申し出ました。5年修了に比し2年間以上のギャップがあるので学力試験は諦めた反面、その年に初めて施行された進学適性検査(文部省)は楽しい2時間でした。合格祝電に驚き躊躇したが八高に入学しました。高校教授から「山岡君の学力成績は悪い。進適の点数で合格できたのだよ」といわれました。学校制度が変わり、旧制高校を3年間で卒業、一浪後に「脳機能を勉強できる」との噂を聞き、新制の日本大学心理学科3年に編入学しました。そこで日本応用心理学会の先生方が進適の作成、採点をされていると知りました。G T管、直流電源による脳波計(通称木製号)が納入され、そのご機嫌を取り、ノーシールドの実験室での脳波の、やがてポリグラフの実験をするようになりました。

自然環境における全人的心理学

心理学科では、狭い実験室で顔面固定器やタキストスコープなどを使った実験が多いですが、私は、オープンフィールドでの実験に憧れて内々に行っていました。数年前にも縁があり、伊豆の山中で噴出した足湯中の脳波などの実験を試み、そよ風

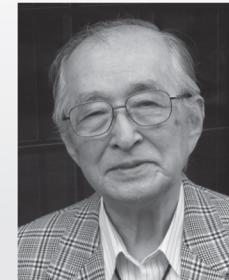
や日当たりなどの自然的変動の影響の大きさに驚かされました。

心理学に限らず必ず、統計・推計的処理を利用します。その際、全く異質な複数の集団を無頓着にまとめてひとつの母集団として量的処理をしたために、それぞれの素集団の質的特質が相殺されてしまうことがあります。このような誤用をしないように厳に忠告したいです。

近年、「癒し」が世間の関心の的になっていますが、その1つ、呼吸法・瞑想で脳波や諸々の自律神経機能に大きな効果が生じますが、被験者の瞑想に対する「動機付け」によって生理的効果が大いに左右されますので、被験者の「質」や「姿勢」に配慮すべきです。

ところで、「スピリチュアリティ」は日常生活における重要な要因のひとつであるのに、特に日本ではほとんど無視されています。日本文学でスピリチュアリティといふと、靈、信仰、超自然的現象、宗教などとにかく偏見を持たれがちですが、本来活き方、人生観、思想、信念といったその人が固有する基本的な働きですので、心理学界でもその概念・定義を含めて注目されて然るべきであろうと思うのです。

心理学で扱われる認知活動の研究では視覚と聴覚に関するものが多いですが、日常生活では嗅覚・味覚・皮膚感覚・平衡感覚などに跨っています。そもそも人間は全体的・統合体として働いていますし、さらに人間集団を含む環境、なかんずく自然環境のなかで生きているのです。従って応用心理学では常に、「人間は環境のなかで生きている統合的、全人的な生活体である」ということを忘れてはならないと強調したいです。



やまおか・きよし

1929年福岡市で出生。
1953年日本大学文学部
心理学科(新制)卒業、
大学院修士修了、博士満期退学。1988年文学博士。
1966～67年オーストリア共和国立ウィーン
大学神経心理学研究所(H. ローラッヘル教授)
留学。日本大学文理学部
心理学科講師・助教授・
教授；文京学院大学人間学部教授・大学院研究科
委員長；日本女子体育大学・短期大学講師、武藏野赤十字病院脳波室嘱託
などを履歴。現職は日本大学名誉教授。日本応用
心理学会、日本心理学会、
日本生理心理学会、日本
パーソナリティ心理学会
の各名誉会員。専門領域
は生理心理学、人格心理学、
スポーツ心理学など。

応用心理学を駆使して社会に貢献

稻毛 教子

諸先輩方から学んだ50年

大学卒業後、愛育研究所に大学院生のつもりで5年間所属させて頂いたのですが、当時の教養部長牛島義友先生から「厚生省と一緒に」との御命令。何のことやらわからぬままに同行すると、保育に欠ける子どもを評定する尺度づくりのプロジェクト。津守眞先生のもとで、『保育必要度評定尺度』として報告。後にフレーベル館から出版。また『乳幼児精神発達診断法』は、親などの保育者に子どもの行動を聞くことで把握できればと5年間かけてまとめたのですが、牛島先生のpragmatismの影響大です。子ども連れの大変さ、子どもが泣く、寝てしまって検査できない実状をみて作成したからです。

5年後、1業種1社の市場調査機関日本リサーチセンター研究部（部長南博先生）では、北大から九大に至る院卒者達との協同作業で、味の素のクノールスープ、東レオペロンのガードル等の調査を担当して、商品化・市場開発に応用心理学の寄与大なることを痛感しました。

ところが、大学時代からの指導教授大川信明先生が早稲田大学生産研究所に移られることになり、私も早大に移ったものの、先生はやめられ、残った私は兼子宙先生の指導で、時代を見越しての女性リーダーシップ開発プロジェクトにたずさわることになりました。企業内実態調査研究を通して、リーダー制導入と定着のための教育を企業に訴えると「女性のリーダーなんて必要ない」「教育は企業でするものではない」と反論されることが多く、実績を作るより他なしと、講演、教育活動に使命感を燃やしてきました。

最後は、豊原恒夫先生が現東京国際大学に教養学部を創設されるにあたり、早大から移籍。授業の他、女性リーダー育成、男女平等社会実現への活動を続けてきました。また、教養学部改組転換にあたり、人間関係学科を福祉心理学科への趣意書に、welfareから wellbeing（貧しい人を救う措置の福祉からすべての人の自己実現の福祉）への転換、すなわち、高齢社会、共働き社会到来で、老人から子どもに至るすべての人が積極的・主体的に生きがいある人生創出志向のために、哲学から派生した心理学の知識や技術を持って福祉の実践に関わる人間を社会に送り出す必要性を書いたのです。こうして定年退職の70歳まで、応用心理学を駆使しての成果の喧伝活動でした。

有用性確認につながる応用心理学

第2次世界大戦後の急激な変化・成長期とはまったく様相を異にする現在（成熟・高齢社会、グローバル化、後進国の台頭、民主国家への戦い等々）、世界中がカオス状態にあるとき、将来への見通しは困難極まりないのでですが、私が諸先輩から学んだことは将来に通じるものと考えますし、山積している問題解決にあたっては、応用心理学の有効性とその発動がますます求められるものと存じます。

“応用”というと、何やら軽くみられる節があるやもしれませんが、“基礎を土台に、深い哲学・倫理をバックボーンに、先見性と創造性と熱意をもってあたってこそ、社会に有用なものが産出される”との考えを強く持っております。



いなげ・のりこ

1956年東京女子大学文学部心理学科卒業。'56年愛育研究所、'61年（株）日本リサーチセンター、'64年早稲田大学生産研究所（現システム科学研究所、'77～'87は特別研究員）・同学生相談センター勤務。'77年現東京国際大学に勤務し、2003年退職。現在、東京国際大学名誉教授。1956年日本心理学会、'57年日本教育心理学会、'58年日本応用心理学会に入会。現 日本応用心理学会名誉会員。

ホープ クロスロードの 登場 星^⑫

日本応用心理学会の未来を担う期待の若手ホープを紹介します。

日本体育大学大学院トレーニング科学系 助教
(財)日本オリンピック委員会 強化スタッフ
(社)全日本アーチェリー連盟 強化部・普及部専門委員

高井秀明



大学紹介

私が所属している日本体育大学（日体大）は、「體育富強之基（たいいくふきょうのもとい）」^{注1)}を建学の精神（理念）としており、1893年に日本体育会体操練習所として設置されて以来、120年近くにわたって、一貫して体育・スポーツを通して人々の「心身の健康」を育み、世界トップレベルのアスリートやその指導者を育成することに務めてきました。現在もスポーツの世界で活躍している日体大の卒業生は数多く、たとえば、競泳の北島康介選手や体操の内村航平選手、アーチェリーの山本博選手などはみなさんもご存じではないでしょうか？ 日体大の関係者がこれまでにオリンピックで獲得したメダルの総数は108個、日本がこれまでにオリンピックで獲得したメダルの総数において日体大の関係者が占める割合は約1／4です。さらに注目すべきは、夏季オリンピックの出場選手は286名、出場役員は172名であるということです。選手はもちろんのこと、役員として数多くの卒業生がオリンピックに参加していることは、日体大としてはとても喜ばしいことであり、建学の精神（理念）が現在も活き続けている証になるでしょう。

自己紹介

日体大における私の使命は、大学院トレーニング科学系の助教として、博士前期課程の修士論文、博士後期課程の博士論文の作成をはじめとした大

学院生の研究活動が円滑に進められるように支援することです。ただ、大学院トレーニング科学系は、スポーツバイオメカニクスやスポーツ生理学、スポーツ心理学、スポーツ栄養学などのさまざまな領域から構成されているため、日々、悪戦苦闘することばかりです。

現在の私の研究はというと、アスリートの競技力向上および実力発揮を目的としたメンタルトレーニングの基礎的研究および実践的研究が中心です。メンタルトレーニングとは、アスリートやその指導者が競技力向上のために必要な心理的スキルを獲得し、実際に活用できるようになることを目的とする、心理学やスポーツ心理学の理論技法に基づく計画的で教育的な活動（吉川、2005）のことをいいます。特に、私はそのなかのリラクセーション技法（自律訓練法、漸進的弛緩法、バイオフィードバック法など）が心理・生理的反応に及ぼす影響について研究しています。国内ではそれらの研究を応用心理学研究やスポーツ心理学研究、催眠学研究などで発表していますが、今後はそれらの研究結果を考慮した上で、トップアスリートを対象にした事例研究も積み重ねていく予定です。

応用心理学としてのスポーツ心理学

近年では、スポーツそのものの文化的な広がりとともに、スポーツ心理学はスポーツにおける広範囲な心理的、行動的問題の解決を目指して、スポーツの諸科学、認知科学、神経科学、情報科学、など多様な領域の方法を取り入れた応用科学とし

たかい・ひであき●1981年、滋賀県生まれ。2005年、日本体育大学体育学部卒業（2003～2004年にはDeutsche Sporthochschule Kölnに交換留学生として派遣される）。2007年、日本体育大学大学院体育科学研究科博士前期課程修了。2010年、日本体育大学大学院体育科学研究科博士後期課程修了、博士（体育科学）を取得する。現在は日本体育大学大学院トレーニング科学系の助教。（財）日本オリンピック委員会の強化スタッフ、（社）全日本アーチェリー連盟の強化部・普及部専門委員としてトップアスリートのメンタルサポートに携わっている。スポーツメンタルトレーニング指導士補、応用心理士。

て捉えられるようになってきました（猪俣、2008）。ただ、現在に至るまでスポーツ心理学の方法論は心理学的手法に依拠しており（猪俣、2008）、スポーツ心理学は心理学の実践的研究として発展してきたといつても過言ではありません。しかしながら、日本応用心理学会が編集している『応用心理学事典』（2007）では、スポーツ心理学は応用心理学の一領域として扱われていません。この現状を知った当時（大学院博士後期課程1年生）の私は愕然とし、事実、空虚感に苛まれました。私がこれまで研究してきたスポーツ心理学とは、一体なにであったのかと。

ただ、ある意味ではこのことがきっかけとなり（その後、長考して）、自分自身の立ち位置が明確化できるようになったのかもしれません。現在、スポーツ心理学が応用心理学として位置づけられていらないというのであれば、位置づけてもらえるよう自分にできる活動をはじめればよいと思い、日本応用心理学会第77回大会を機に「スポーツの心理を追究する」というテーマのワークショップを企画し、始めました。

「スポーツの心理を追究する」 ワークショップ

本ワークショップでは、心理学がどのようにスポーツの世界に「応用されているのか」「役に立っているのか」ということに焦点をあてて議論しています。昨年度のワークショップでは「応用心理学としてのスポーツ心理学」を副題とし、スポーツ心理学の成り立ちや国家プロジェクトで行われているトップアスリートの競技力向上を目指したメンタルサポートに関して話題提供していただきました。また、本年度のワークショップでは「応用心理学としての実践」を副題とし、トップアスリートのメンタルサポートに携わっている、アプローチの方法が異なる2名のスポーツ心理学のコンサルタントにそのサポート内容を紹介していただきました。なにより、本ワークショップの特長

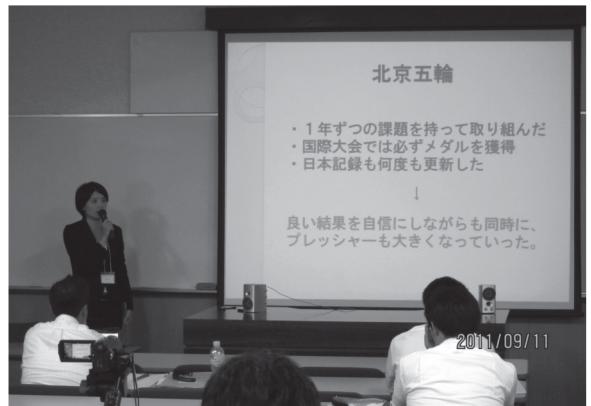


写真1 本年度の中村礼子選手による話題提供の一場面

としてはスポーツの実践場面からの「生の声」を聴いていただけます。昨年度は2004年のアテネオリンピックで銅メダルを獲得した藤丸真世選手（シンクロナイズドスイミングのチーム競技）、本年度は2004年のアテネオリンピックと2008年の北京オリンピックの2大会で銅メダルを獲得した中村礼子選手（競泳の200m背泳ぎ）にオリンピックを振り返り、ご自身のメンタルマネジメントについて語っていただきました（写真1）。

最後になりましたが、来年度以降も本ワークショップを継続的に企画いたしますので、スポーツの世界に少なからず興味・関心をお持ちの先生方には、本ワークショップにご参加いただき、ご意見を賜りたいと思います。多くの先生方にご参加いただけますよう切にお願い申し上げます。

注1) 真に豊かな国家・社会を実現するためには、体育・スポーツの普及・発展を積極的に推進し、健全な心身を兼ね備えた全人格的な人間を数多く育成することが肝要である。

猪俣公宏（2008）スポーツ心理学の定義 日本スポーツ心理学会（編）スポーツ心理学事典 大修館書店

吉川政夫（2005）トレーニング可能な心理的スキル 日本スポーツ心理学会（編）スポーツメンタルトレーニング教本 改訂増補版 大修館書店

日本応用心理学会（編）（2007）応用心理学事典 丸善

大阪大学大学院人間科学研究科
人間科学専攻

蓮花のぞみ

応用心理学と超高齢社会

現在日本の高齢化の進展は急速であり、今後さらに高齢化が進んだ社会の到来が予見されています。人間誰しもに訪れる高齢期において、安全で活動性の維持された社会の創造を目指すためには、心理の視点を活かした実証的な研究成果を挙げることで現場に還元できることが数多くあると考えています。現場の問題解決に挑むことができ、かつ老年心理学の専門知識と着眼点を有する心理学者が必要だという問題意識を抱いて研究を始めました。

加齢に伴い心身機能が変化することで、高齢期には物忘れなどのエラーや不安全行動が生じることがあります。特に認知機能は高齢者が円滑に自立した生活を送るために重要な能力といえます。しかし、日常生活において、認知機能の変化は緩慢に進行する点や個人差が大きい点が特徴です。実験室では加齢に伴う低下が顕著ですが、日常生活を送る上で、多くの健常な高齢者はリスクを回避する補償方略を行うことで、結果として機能変化の影響を解消し危険性を一定のレベルに保つことが示唆されています。従来の研究は、加齢に伴う機能変化に着目した検証が中心となっており、高齢者が機能変化をいかに補償しているかに関する実証的研究は未だ不十分です。補償方略といつても多様であり、その内容や効果について定量的に検証することで効果的なエラー防止策を提言したいと考えています。

研究内容

認知機能の影響を踏まえた上で、補償方略の観



点から高齢者のエラーやメカニズムを明らかにすることを目的として、場面を特定しない日常場面の行動、および特定の場面として交通場面の運転行動を対象に研究を行っています。

私は博士前期課程より認知加齢研究で重要とされる記憶に焦点を当て、日常生活全般に関係する記憶エラーと補償方略について検討してきました。特に、自立した日常生活を円滑に送る上で重要な「し忘れ」という展望的記憶のエラーに焦点を当てて研究を行いました。また、超高齢社会の到来は道路交通にも大きな影響を与え、自動車乗車中の交通事故死者数のうち 65 歳以上がその 37 % を占めています¹⁾。博士後期課程からは現在高齢者の関わる問題のなかでも、加齢の影響が生命に直結するため、解決が危急の課題となっている交通場面に焦点を当て、高齢ドライバーの運転行動と補償方略の関係についても検討しています。

高齢者の記憶に関する補償方略

展望的記憶研究において、実験室と日常場面ではパフォーマンスが異なるというエイジングパラドックスが生じており、実験室では高齢者の成績が低く、生物学的な加齢に伴う低下が反映されやすい一方、日常場面では補償方略が用いられるため、認知機能の低下が表面化しないことが考えられます。展望的記憶方略の利用方法を検討した結果、高齢者と若年者では利用形態が異なり、高齢者はエラー防止のために能動的に働きかけるアラーム等の機器の利用が少なく、手帳やカレンダー

れんげ・のぞみ●1984年大阪府生まれ。2007年神戸大学発達科学部卒業、2009年大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程を修了。2011年現在、同研究科博士後期課程に在学中。また2010年より（独）日本学術振興会の特別研究員として研究活動に従事。日常場面と交通場面で高齢者が行う補償方略に着目して、認知加齢研究を進めている。

といった記憶補助の利用が多いことが示されました。現在は、頭を使って記憶する内的方略、物を使って記憶する外的方略に加え、モチベーション等の心理要素を取り入れた努力方略を含む記憶補償質問紙、記憶の失敗頻度の自己評価²⁾と展望的記憶パフォーマンスの関係を検討しています。その結果、自己評価が低い人ほど方略を用いており、なかでも普段から内的方略や努力方略を用いている人ほどパフォーマンスを向上させる一方、他者に頼る方略を取る人ほどパフォーマンスが低いことがわかつきました。

高齢者の運転に関する補償方略

高齢者の事故形態および運転特性は、若者とは異なる特徴があります。実際の交通環境で走行実験を実施した結果、高齢ドライバーは右折時に進行方向と反対側の振り返り確認が不十分であり、一時停止交差点での減速が不十分かつ減速を開始するタイミングが遅いという点が明らかとなり、また自己評価と実行動との乖離が示されました³⁾。しかし、高齢ドライバーは悪天候の運転を避ける方略や同乗者と喋らない等の運転中の二重負荷を減らすといった運転補償方略を用いていることが考えられます。高齢者講習受講者を対象に質問紙調査を行った結果、個人特性によって用いる運転補償方略に一部違いがあることや、運転補償方略と事故・違反歴との関連性が示されました。また、近年高齢者講習に認知機能の測定が導入されましたが、行動特性と認知機能の種類との関連性についての詳細な検討は不十分です。現在、運転挙動と認知機能、補償方略の三者の関係を検討中ですが、処理の速さが運転に関連していることや、特に確認やハンドル操作と認知機能の関係が強いことが示唆されています。

今後の展望

以上を踏まえて、最終的には、補償方略が有効に働く場合には、加齢に伴う優れた側面を適切に評価して、エラー防止に活用するための補償方略

の効果的な学習方法を検討することが重要だと考えています。一方、補償方略を行っているにも関わらずカバーしきれずに問題行動を顕在化させてしまう側面も見受けられます。補償が有効に働くかしない場面には、人的支援および環境面の充実を図った対策を立てる必要があると考えています。

また、高齢期には正常加齢の結果として認知機能の低下がみられるだけでなく、病的加齢として疾病の罹患率も高まります。正常加齢と病的加齢は必ずしも明確に分離できるわけではありませんが、今後の研究では、正常加齢と病的加齢の違いに着目する必要があると考えています。さらに、加齢による変化は高齢期に突然生じるわけではなく、生涯にわたって緩慢に変化するため、単に年齢によって区切るのではなく、生涯発達の視点を意識して対策を立てることが大事だと考えています。

問題解決のために工学など他分野の専門家や実務の方々と柔軟に協力しながら、心理学研究者の立場から出来ることは何かということを念頭に置いていた上で自分が果たす役割を發揮できるように頑張ります。まだまだ力不足ですが、超高齢社会の発展に貢献できるよう、また応用心理学研究の発展の一端を担えるよう精進したいと思います。今後ともご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

1) 内閣府（2010）平成22年度交通安全白書

2) Gondo, G., Renge, N., Ishioka, Y., Kurokawa, I., Ueno, D., & Rendell, P. (2010) Reliability and Validity of the Prospective and Retrospective Memory Questionnaire (PRMQ) in Young and Old people: A Japanese Study. Japanese Psychological Research, 52, 175-185.

3) 蓮花のぞみ・多田昌裕・白井伸之介・蓮花一己（2011）交差点における高齢ドライバーの運転行動と自己評価の関係—非高齢ドライバーとの比較— 交通科学, 41, 55-65.

ホープ クロスロードの星14 登場

東洋大学大学院社会学研究科
社会心理学専攻

飯嶋 慧

はじめに

私は、学部生のころ福祉心理学科で学んでいました。福祉心理学科とは福祉系・心理系の両方の単位を修めるというものでしたが、私は“福祉心理”という領域で研究をしようと考えていました。今では福祉心理学という領域も認知されつつありますが、当時は何をやるのか、何ができるのかわからない分野です。そこで、心理と福祉の間にある共通性の高い課題を探しました。当然、福祉でいえば看護分野、心理でいえば臨床分野などは共通項が多いのですが、それ以上に大きな課題がありました。それは言葉の問題です。今でもそうですが、心理と福祉の間で同じ用語が違う意味で使われていたり、あるいは概念を誤用していたりします。したがって、たとえば福祉の現場で心理の理論を正しく応用するためには両者の間に“翻訳家”が必要となります。私はその翻訳、言い換えれば誤用の可能性が低い応用方法を実践する必要があると考えました。

就労支援への関心

当時、私は精神保健福祉の分野と産業組織心理学の分野に関心を持っていました。また、現実の問題として、精神障害者の方への就労支援が実際の就労につながりにくいことがありました。当時の就労支援は、内職などを通じて就労とする小規模作業所といわれるものがその代表です。1つの作業所に10~15人の当事者がいたとして、就職を理由とした退所者は年間1人いるかどうかといった状況でした。そこで私は“支援の効率”を向上させることを研究対象としました。しかも誤用の可能性が低い方法による効率の向上です。



就労支援の現場ではすでにさまざまな手法が取り入れられており、施設によって異なります。つまり、施設ごとにさまざまな方法で支援効率を上げようとしているわけです。もし未知の手法を取り入れて効率を落としてしまったとしたら、支援を受ける側の方たちの時間も奪ってしまうこともあります。そこで新しい手法ではなく、環境の整備による効率の向上を考えました。支援を受ける側の立場を意識すると、支援者は当事者にとつての環境と位置付けることができるからです。個人と組織環境の間の適合（P-E fit）が作業効率、満足感を向上させるといった報告は、以前から多くあげられています。就労支援施設にこの考え方を応用すると、先に入所している方は先輩になり、さまざまな指示を出す支援者は上司とみることもできるでしょう。また、施設内の雰囲気は組織風土と言いかえられます。実際には当事者と支援者の関係はイコールで上司と部下の関係ではありませんが、卒業論文で行ったインタビューでは、当事者の支援者に対する思いは上司に対するそれに似ていました。いずれにしても、精神障害者就労支援施設という場に個人と組織環境の適合を持ち込むという例はそれまでに見られていなかったので、まず実態を把握する必要がありました。

就労支援施設内での価値観の合致

卒業論文でのインタビューでは、私は支援者の価値観と当事者の価値観がズレているような印象を受けました。若い当事者は特にそうでしたが、

いいじま・けい● 1983年埼玉県出身。2007年東京国際大学人間社会学部福祉心理学科卒業。2009年東京国際大学大学院社会学研究科応用社会学専攻修士課程修了。現在、東洋大学大学院社会学研究科社会心理学専攻博士後期課程在学中。学部生のころより一貫して精神障害者就労支援について研究を行っている。

就労のための準備を目的として施設に通っています。しかし、支援者は支援を目的とするのですから、当然無理はさせられません。結果として、当事者のやる気がそがれてしまうこともあるようで、インタビューではそういう不満が出たこともあります。同時に、支援者の方からは、「就職させるという想いに対して、当事者が冷めている」といった話も聞けました。このことから、修士課程在学中においては、現場では人と環境の不一致があるのではないかと考え、施設を回って当事者と支援者の方の両方から就労の意味についての価値観を調査しました。簡潔に結果を紹介させて頂くと、一般的には支援者と当事者との間に極端な差ではなく、またその価値観は一般学生とも大きくは離れていない、といったものになります。もちろん当時の調査にはさまざまな問題もありましたが、重要なのは価値観に大きな差異は見られないということです。つまり、価値観が合致しているにもかかわらず、未だ支援効率は低いということになります。悩んだ末に、就労価値観には、就職に向く傾向と向かない傾向があるのではないかと考えました。

就労価値観の傾向

現在は福祉的就労と一般就労という2種の形態に対して、価値観による向き不向きを仮定して調査を行っています。福祉的就労と一般就労という表現はなじみが薄いかもしれません、この両者は精神保健福祉、社会福祉の辞典で“就労”について調べるか、あるいは作業所などで調べると類似するものが出てくるかと思われます。表現はさまざまですが、大筋では福祉的就労は金銭などの有形物を報酬としない労働であり、一般就労は障害者雇用も含めて単純に一般企業に就職することです。また、福祉的就労の場合は通常雇用契約を結ばない（または金銭報酬が少ないので結べない）ため、就労とは言いにくいところがあります。この2つの労働形態に合致する価値観として、今現在はやりがいなどの無形物を重視する場合は福祉的、

収入などを重視する場合は一般に向くのではない
かと考えています。

この考えを確かめるために、最近はWeb調査によつて就職している方の価値観と、就職していない方の価値観を調査・比較しました。この調査では、就職していない方は就職している方よりもさまざまな就労価値観を重要だとしていました。収入については職がない、つまり定収がないですから当然だと解釈できます。また、健康についてはそもそもあまり健康を意識しすぎると働くことができないと考えることもできます。先にも出ましたが、一般に支援者と当事者の間で大きな価値観の差はありませんでした。しかし今回の結果をふまえると、必要以上にいくつかの労働価値を重要だとしていることが問題ではないかと考えられます。この調査では、精神障害者の方は少なく、ほぼ全てが精神疾病をもつが障害者ではないという方でした。そこで、現在では改めて施設内外で障害者に焦点を合わせて再度調査することを検討しています。

最後に

第78回大会での発表の際には多くの方が質問に来て下さいました。精神保健福祉や、臨床のテーマでは参加者の募集が難しい場合も多くありますが、Web調査によって臨床分野や、精神保健福祉の分野の研究が新たな発展をしてくれれば、と思っています。また、今後もより多くの方から質問をいただけるよう精進しなければと思います。

飯嶋 慧 (2009) 就労支援施設を利用する精神障害者とその支援者の就労観は特殊か – 就労観の大学生と精神障害者及びその支援者間比較 – 日本社会心理学会第50回大会発表論文集

飯嶋 慧 (2010) “福祉”的な就労支援に関する理論的研究. 東京国際大学大学院社会学研究科紀要, 応用社会学研究 20, 45-64.

飯嶋 慧 (2011) Web調査による精神病患者における就労観の在職状況間比較 日本応用心理学会第78回大会発表論文集

東日本震災から約1カ月後の4月13日は、私にとって少々慌しい1日だった。夕方には自宅にガス局の人が来る。待ちに待ったガス開通の日である。やっとお風呂に入れる。なんとしても早めに帰宅したい。しかしその前にひと仕事控えていた。この日は、「東北大学による東日本大震災1カ月後緊急報告会」の日だった。東北大学防災科学研究拠点が主催した緊急報告会である。今回の地震のメカニズム、津波被害の実態、東北地方の震災の歴史等々、拠点メンバーがこのひと月、自宅や研究室の復旧をしながら掻き集めたデータを、少しでも早くお伝えしたいという趣旨の会であった。私は震災後の体験から感じとった心理学的な

めだった。津波や原発がもたらした悲劇の渦中にいらっしゃる方々のことを思うと、私が震災を語ることにはためらいを禁じ得ないが、軽微ながらも未曾有の大震災の現場にいた者として、そして研究拠点のメンバーとして、今まで経験してきたことについて、改めてお伝えさせていただきたい。

籠中の興奮・渦中の平穏

発災直後、仙台市内の様子は一変した。停電で夜は真っ暗。ガス・水道が止まって炊事はできない、お風呂にも入れない。携帯電話が通じないことで、忘れ去られていた公衆電話には長蛇の列。お店はシャッターを閉じたままで、何も買えない。交通が途絶して脱出さえできない。ふだん当たり前に過ごしていた日常が、いかに危ういバランスの上で成立していたのかを知った。

ここでまず取り掛かったのが研究室メンバーの安全確保だった。同僚の先生と研究室に泊まり込み、やってくる学生に食事を与える。寝床の心配をする。並行して安否確認を行い、連絡手段を確保する。こうして研究室全員の安否が確認できたのは3月15日の朝であった。11日の夕方からその時までの3日半、私の世界は「今・ここ」に限定された狭いものとなった。自分と身近な者のために、今日を生きる算段をする。それが生活の全てだった。

このとき、ある種の清々しさを感じていた。不謹慎かもしれないが、正直な感想である。目覚めてから眠るまで、食べることと安全のことだけに集中する毎日は充実していた。停電で真っ暗な夜空には怖いほどにたくさんの星が見えた。美しかった。非常事態のなかで不思議な興奮を感じていた。

学生は、自發的に家のなかの食料を持ってきてくれた。自分の分をとっておけと言っても、競うようにお米やカップ麺、お菓子などを置いていくのである。私もつられて秘蔵のワインと缶詰を掏出した。ガスの出ないなか、炭火焼のお店が露店を出していたところにめぐり合わせた学生が焼き鳥を買ってきてくれた。研究室の大机は、多量の飲食物で山盛りとなった。事情を知らなければ、山賊の酒盛り場のような状況となった。

避難所で食事が振る舞われるとき、整然とした

青葉山の避難生活



東北大学大学院文学研究科心理学講座 阿部恒之

あべ・つねゆき ◎ 1985年東北大学文学部哲学科（心理学）卒業、同年株式会社（ビューティーサイエンス研究所）、1999年東北大学大学院文学研究科（心理学）編入学、2001年修了。博士（文学）。2005年東北大学大学院文学研究科心理学講座助教授、2010年教授。専門は感情心理学。

課題を、「被災者のマナー／被災後の生活と治安」というタイトルで報告させていただいた。会場は多くの市民やマスコミ関係者で埋まり、静かな熱を帯びながら肅々と進行し、そして終了した。報告会の後は速やかに帰宅し、無事ガスが開通した。久々の自宅入浴は格別だった。ともあれ、報告会は、3カ月後、6カ月後にも実施され、来年3月の1年後報告会を目指して拠点メンバーの研究は続いている（<http://www.cneas.tohoku.ac.jp/labs/rdpm/front.html>）。

これらの報告会をはじめ、震災について語る機会をたくさんいただいた。しかし、私自身は仙台の青葉山の中腹の研究室にいたので津波に追われることはなかった。福島はお隣の県であり、心理的にもすぐ近くであるが、仙台の放射能の数値は低

無言の列ができた。スーパーが開店したときも、数キロメートルに及ぶ穏やかな行列が発生した。とはいえ、ほかに先駆けて繁華街の電気が開通したときは、自動販売機のコンセントが抜かれ、携帯電話の充電をする者が現れた。しかしその「電気泥棒」たちも、整然と順番を待ち、短時間で次に譲るというお行儀のよさだった。諸外国で散見される災害後の略奪や暴行を見ることはなかった。後日、警察庁の発表データを調べたところ、震災以後の東北地方の犯罪件数は減っていたくらいである（但し福島の強制避難区域の空き巣は増加。委細は8月9日の国際犯罪学会にて発表）。

『災害ユートピア（ソルニット著・亜紀書房）』には、災害地のど真ん中で、助け合いと譲り合いの精神に満ちた別世界が形成されたことが報告されている。震災前に読んだとき、そこに描かれていた、あたかも台風の目のような穏やかな災害コミュニティを想像することは難しかったが、確かにそういうこともあると、この時初めて納得できた。むろん、被災の程度などによって状況が異なり、ユートピアなどと言ってはいられない地域があったことも確かである。

復興の狼煙

研究室メンバーの安全が確認できた3月15日頃には、高速バスなどによる脱出が可能になった。学生は次々と故郷に避難した。空っぽになった研究室は寂しいものである。私も一旦、家族のいる関東に帰った。計画停電は意外と厄介だったが、少なくともお風呂に入れる。焼肉屋さんに行けば、カルビだとか冷えた生ビールだとか、好きなものをいくらでも注文できる。過去においては当たり前だったことが、しみじみとありがたく感じた。

すぐに戻った仙台も、津波の来なかつた地域は急速に日常を回復しつつあった。そんなとき、「復興の狼煙」というポスターを見た。そこに写っていたのは、津波被害にあった人たちの力強い姿だった。そして、何とも言えない、しみじみと胸を打つコピーがついていた。ともあれ、ご好意で掲載させていただいたポスターをご覧いただきたい。

「頑固者の、出番のときだ」「前よりいい町にして

やる」……悲しみから立ち上がり、前を向いて、最初の一歩を歩み始めた人たちがいる。こちらが勇気づけられた。「ひとつひとつ咲かせるよ」……勇ましいだけない、東北人ならではの、静かな覚悟。

このポスターの売り上げは、モデルとなった人たちの町に寄付されるという。いったい誰がこんな凄いことを思いつき、実行しているのか。強く惹かれた私はプロジェクト主催者のところに押しかけた。おそらく、かなり老練なやり手だろうと想像していたが、出迎えてくださったプロデューサーとカメラマンは、ともに30代の青年だった。お話をうかがううちに、被災者第一で取り組む姿勢が見えてきた。有名になれるチャンスなのに、



主催者の許可を得て掲載
http://fukkounotoshi.jp

復興の狼煙
ポスター
プロジェクト

http://fukkounotoshi.jp

あえて自分たちの名前を出さないというスタイルを守って頑張っていた。感服した私は押しかけ応援団になろうと張り切ったが、私が声をかけた多くの人々は、すでにこのプロジェクトのことを知つて注目していた。

最近、新しくできたポスターをいただいた。「お化粧をして立ち向かう」……化粧の心理的作用に関する研究をやってきた私の心に沁みるコピーである。実際、このたびの震災では、多くの化粧品メーカーが化粧を通じた支援のために被災地に入り、活躍している。

心理学が貢献できることはきっと沢山ある。さまざまな形での応援を頂戴できれば幸いである。そして何より、東北地方への眼差しが途切れないことを切に祈る次第である。

大学探訪

研究室におじやましました

応用心理学の教育を考える 白梅学園大学 子ども学部

| 金子尚弘(白梅学園大学子ども学部教授)

金子研究室と発達臨床学科の歴史

私の研究室のある「子ども学部発達臨床学科」は、3年前の2009年に開設された心理学をコアとした学科です。はじめに学科の歴史を簡単に紹介しておきます。

母胎となった短期大学心理学科は1961年に、我が国最初の短大の心理学科ということもあり、「心理技術科」の名称で認可されたと聞いています。1989年に「心理学科」に名称変更しました。

1957年に短期大学保育科を開設した財団法人社会教育協会（現在は公益財団法人）には戦時中「心理学部」が設置されており、また教育研究所では応用心理学の研究が行われていました。また終戦直後には統計研究所が設けられるなど、心理学の基礎と応用研究に理解のある財団でした。これは協会運営の主要な女性メンバーで、後に学長、理事長となった樋口愛子女史が東北大学の心理学科で学び、東京文理大学の助手をしていましたことに起因します。心理技術科開設時の教員の多くが基礎系の心理学を修め、応用分野でも活躍する人たちでした。また学科開設時には、応用心理学会の発足に熱心だった田中寛一教授が学監を務めていたこともあり、職業適性検査用具や知能テスト類、視野計や瞬間露出器、記憶実験用ドラムなど、知覚や学習関係の実験器具など全てが揃えられていました。そして今に続くネズミ小屋も開設後直ぐに「建設」されました。

ネズミ小屋から動物実験飼育室へ

私が奉職した当時、応用心理学会で現在も活躍している荻野七重先生がラットの実験を担当していました。その頃の動物飼育室はネズミ小屋と呼ばれていましたが、確かにベニヤの壁からクレゾール塗料の匂いがする正真正銘のネズミ小屋でした。特に動物実験室というものはなかったので、実験演習用の小部屋でスキナーボックスを使ってオペラント条件づけや、またベニヤで自作したラットのY字迷路実験は廊下でやりました。徹夜で自作したY字迷路の塗料のせいでのラットがフラフラしてしまったことも、今では失敗談として忘れられない思い出です。

マウスを被験体に使うようになったのは、1977年頃、研修休暇を取り、米国のジャクソン研究所で多種の近交系マウスに出会って以来です。1981年に現在の動物飼育実験室が完成しました。当時、力も弱く動きの少ないマウスは、実験動物としてラットに敵わないと考えられていました。

しかし食べる量や排泄物の量など、飼育は遙かに楽なのです。力の問題は反応レバーの工夫で凌ぎました。動きの優雅さは、



1969年頃のネズミ小屋



金子尚弘(かねこ・まさひろ) ◎1974年慶應義塾大学大学院心理学専攻博士課程を終了、1969年白梅学園短大心理技術科助手、1977年American University Research Associate、1978年The Jackson Laboratory Exchange Visitor、2011年白梅学園大学子ども学部教授。専門は実験行動分析学および応用行動分析。

決して頭が悪いわけではないことがわかりました。軽いレバーを1秒間に数回押すこともできるし、音や光の刺激に反応して、素早く正しい側のレバーを押すこともできます。回転籠があれば1日数百メートルを歩きます。

匂いの好みと、魚の嗅覚弁別学習実験

私は嗅覚に興味があり、香料会社から試料をもらい、女子学生を対象に「匂いの好み」についての調査研究や、弁別と般化の実験をしたことがあります。その試料を使って、熱帯魚（コバルトスズメ）で、嗅覚の弁別学習実験も行っていました。実験のため、油壺の京急マリンパークまで通った時期もあったのですが、仕事との両立はさすがに難しくなりました。水槽に仕切りを入れた弁別箱に、魚の通過を検出する光電スイッチと、正反応に対してピペットから餌を吹き出す装置を自作して、夜間部の授業が終わって学生がいなくなる11時頃から夜中まで実験をしていました。海水魚なので、時々真鶴まで海水を取りに行き、人工海水と半々にブレンドするといった面倒はありましたが、慎重に匂いを嗅ぎ分けて餌が貰える側に飛び込む水色の小さな姿を見ると苦労は忘れることが出来ました。

動物実験とその応用

私の研究室は一応「実験行動分析学」研究室と言っているのですが、実際には「動物行動実験の他分野への応用あるいは他分野との連携」ということになります。NECのPC-8001や8801などパソコンが簡単に使えるようになっ



2階建てマウス用スキナー箱

てからは、学生も BASIC で動物実験制御のプログラムを書いて、マウスの光点点滅の CFF(臨界融合頻度) の測定や、嗅覚刺激の弁別学習の実験もできるようになりました。匂い刺激の弁別や般化の実験も、感覚や学習の基礎的な研究というよりも、動物心理物理学的な手法の開発という応用面を考えています。また、ノックアウトマウスを使って、脳細胞の役割と行動の関係を見つけるという実験研究も、脳科学への応用あるいは連携ということになります。

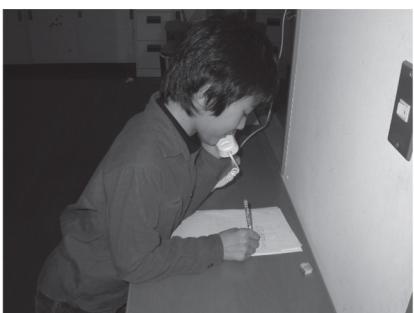
私の研究室では、さまざまな事情から、定期に行う実験は諦め、かなり以前から 2 階建てスキナーボックスを使って 24 時間連続実験を採用しています。簡単に言えば、マウスが勝手に実験を続けているという状況です。また加齢という要因を加えて、長期の実験を試みてきました。ところが今では行動実験の安定性から可能な限り接触しない、動物愛護の観点から個体数を減らすという現代風実験の流れに見事にのってきてしました。この実験スタイルを守って、動物実験の技法を開発して、脳機能、遺伝、行動毒性の研究に貢献することができればと考えています。

プレールームでの試行的療育

動物実験だけではなく、プレールームでは、応用行動分析の考えにもとづいた療育プログラムの開発を行っています。本格的な療育ではなく、比較的軽度な発達障害を持つお子さんを、

理解のある親御さんから「借りて」、試行的養育を行っているわけです。3年といった長期の場合もあるし、半年の場合もあります。主として短大時代の学生の卒業研究の一環として実施したのですが、親御さんからは非常に感謝されました。特に私を勇気づけたことは、うるさく口を出さなくとも、学生が相談して作り上げる療育プログラムが応用行動分析の考えに沿っていました。療育の実践経験と達成感が、学生たちにとって大きな収穫になったと思います。

写真は、電話を受けたらメモする練習です。電話を受けると「ウン、ウン」と聞いている真似をしてしまうので、相手（祖母ですが）の名前をメモしてみようという試みです。



プレールームでの試行的療育場面

動物実験の演習科目

最近の心理学系学科では珍しくなってしまいましたが、私が分担で担当する演習授業科目「発達臨床実験法」では、マウスを使ってY字迷路の実験を行っています。短大時代は2コマ続きで本格的な実験が出来たのですが、資格関連の授業科目も多く、そのため1コマの授業になりました。もっとも実験は1週間連続休みなので、コマ数はあまり関係ないかもしれません。

幼稚園や特別支援学校の教員資格も取得できるカリキュラムに、動物実験を加えているのは、教師として、療育者として「ヒトと環境の関係を客観的に分析できる」ようになってほしいと

の思いからです。試行を重ねて、正解できないのはマウスが悪いのではなく実験者の失敗だと気づいて欲しいからです。相手を変えるのではなく、自分自身が「良い教師」に変わることを期待しているのです。



マウスを使ったY字迷路実験の演習風景

初めてのゼミ学生

4年制大学になって初めてゼミ生を募集しました。動物実験を含む実験行動分析学の研究と、発達障害児の療育を実践する応用行動分析のゼミとして募集したのですが、応募は2名だけでした。動物実験を嫌ったとか、資格に結びつくゼミに流れたとか、解釈はいくつかあるようです。動物を使った基礎実験も経験させようと張り切っていたのですが、まだまだ世間のイメージもないのは当然なので、少し様子を見ているところです。私の経験からすると、実験行動分析学の知見や、装置や手続きの工夫といった基礎研究の苦労は、幼児教育や療育、特別支援教育の場など、実践の場で起こる現象の理解、分析に大いに役立つと思います。「基礎がわかれれば応用が出来る」というスローガンのもと、今はゼミ生を連れて療育施設を見学したり、また他大学の動物実験室の訪問をしています。応用心理学会の先達たちが、心理学の基礎研究の成果を世間の日常の出来事に役立てようとした心意気を、この学生たちに肌で感じて貰うために、今のところは実験室を飛び出して、一緒に広い世間を見て歩こうと思っています。

職場探訪

自動車事故防止と被害者支援を実践

独立行政法人 自動車事故対策機構名古屋主管支所

| 神作 博 ((独)自動車事故対策機構適性診断専門委員・中京大学名誉教授)

NASVAの歴史、目的、構成

NASVA（ナスバ）は運輸省（当時）の肝煎りで1969年度以降全国9カ所に順次設置されていった「運行管理指導センター：札幌、仙台、東京、新潟、名古屋、大阪、広島、高松、福岡」を発展解消する形で全国規模で1973年に発足した特殊法人自動車事故対策センター（特殊法人自動車事故対策センター法に基づき運用されている）を前身としています。

2001年8月には「適性診断実施機関認定期度」が実施されNASVAは国土交通省より、その認定を受けて以降、適性診断業務をその指定に従って実施中（詳細は後記）です。

目的は、標記のとおりであり、本部は東京、他は東京のほか各府県庁所在地に1カ所ずつ、北海道は札幌、函館、旭川、釧路の4カ所に設置されています。上記9センターの地には主管支所が置かれ、当該府県の業務の他、近隣支所の統括業務も行っています。（NASVAの全国組織は、1973年の発足当初より、故鶴田正一名誉会員（元大阪大学教授、中京大学名誉教授）のフランス国鉄の視察・調査（日本学術会議からの要請：当時旧国鉄労働科学研究所在職中の結果を参考にして設置された由です。）

NASVAの業務

業務内容は次のとおりです。

- ①運行管理者等の指導講習
- ②運転者の適性診断・カウンセリングの実施

- ③NASVA 安全マネジメントサービスおよびセミナー・講習会の実施
- ④運輸安全マネジメント評価
- ⑤自動車事故者の療護施設の設置と介護・看護等の実施
- ⑥介護料の支給
- ⑦自動車事故被害者への援護事業（育英資金の無利子貸与、友の会活動、家庭相談員による相談応需）
- ⑧自動車アセスメントおよびチャイルドシートアセスメント
- ⑨交通事故被害者ホットラインによる相談応需など

適性診断業務

適性診断（主として、心理諸テストからなるもの）は、1973年の前身センターの発足以来、原則任意受診で運営されてきましたが、2003年8月の国土交通省の制度変革により、大きな変革が生じました。つまり、職業運転者（バス、タクシー、トラック運転者）に対するシステム的発想による「義務付け診断」制の導入です。まず、新規に職業運転者にならんとする運転者は「初任診断」を、また、65歳以上の人は「適齢診断」を受けなければなりません。さらに、事故を惹起した運転者は、事故内容・規模に応じて、「特定診断Ⅰ」あるいは「特定診断Ⅱ」を受診することになっております。

このほかに、従来よりの任意の「一般診断」と「特別診断」（白ナンバーの運転者も受信可能）は存在しております（受診状況は表参照）。



神作 博 (かんさく・ひろし) ◎1934年千葉県生まれ。1957年千葉大学文理学部（心理学専攻）卒業。防衛庁航空医学実験隊航空心理研究員を経て、1968年中京大学文学部助教授（応用心理学担当）。1973年同教授、心理学部長代理、大学院文学研究科長を歴任、2006年定年退職、名誉教授、医学博士。1970年名古屋運行管理指導センター発足と共に同センターに関係、1973年自動車事故対策センター創立以降、本部業務改善検討委員（2006年まで）、適性診断専門委員（現任中）。

表 2010年度の受診状況

業態	20代	30代	40代	50代	60代	70代	合計
バス		1	6		1		8
ハイタク			1	3	7	2	13
トラック	1	8	10	7			26
自家用		1					1
全体	1	10	17	10	8	2	48

2008年6月より、インターネット活用の新システムが導入され、端末が希望する事業所にまで伸展され、受診者が各勤務場所でも受診可能となりました。また、NASVAの適性診断員の手によるカウンセリング付の診断も実施されております。心理学関係としては瞠目のことですが、1973年以来35年間に、全国で受診者延総数が1000万人を突破（昨年8月3日）、以後も毎年約40万人が受診しております。

もう一つ大事なことは、民間等の団体でありましても、一定の要件を満たし、申請をし、国土交通省の認可が得られれば、診断項目に“ある限定”はありますもののNASVAと同様の診断業務が行えるようになったことです（詳細は関係部署へお問い合わせ下さい）。

当 名古屋主管支所について

当名古屋主管支所の歴史は、1970年に開設された「名古屋自動車運行管理指導センター」に始まります。当時運輸省の肝煎りで、愛知県バス協会、県・市（名古屋市）タクシー協会、自家用車組合の共同出資・支援で設立され、数人の構成員（うち、本学心理学科卒業生2名を含む）で、市販の運転適性機器等を用い、運転者の特性把握とその結果の通知により、業務が開

始されました。用いられた適性診断機器は、「速度見越反応検査器」、「処置判断検査器」、「選択反応検査器」、「Y-G性格検査（質問紙検査）」などでした（先行していた東京及び大阪の同種センターの状況を参考にして決定された由です。）

現在当主管支所は、JR名古屋駅前の目抜き通りのビルの4階に所在し、職員は主管支所長以下17名（うち、適性診断担当職員等6名）で構成され、愛知県内の運転者・事業所を対象に前記業務を遂行すると共に、静岡、三重、岐阜、福井の各支所の統括業務を遂行しています。

特に、名古屋主管支所における特別診断の現況

特別診断は、一連の各種適性診断のなかで特徴のある診断です。すなわち、①受診者の「任意」の診断であり、②1名の診断時間は3～4時間を要するもので、③各主管支所で委嘱された「専門家」が主として担当しています。

筆者は1973年の当機構（当時は「センター」）発足以来、「適性診断専門委員」の名称の委託を受け、ずっとこの診断を担当してきています。診断の仕方は大枠に関しては定められているものの、基本的には各専門委員の判断に委ねられています。

筆者の行っている特別診断の内容は、①従前に実施した当該受診者の一般診断の結果を経年的（原則として職業運転者は3年に1度程度繰り返し受診しているので）変化を診ます。②心身に関する医学的見地よりの質問紙調査（CMI）と作業検査・抹消検査を実施します。③同伴の上司・管理者へのインタビュー④受診者へのインタビューおよび事故対策についての話し合いなど（③、④はアシスタントも同席）、必要に応じて他のテストや検査も追加実施します。

これらを通じ、可能な限り、事故の発生状況を探り、それに基づき、受診者を軸としてのるべき方策・措置を共に考え、案出し、また関連の社会組織（含対人環境）・法的規則、などの改善・改良にも触れます。

筆者の担当した件数はほぼ 1000 件（名）。最近 1 年半（平成 22 年度以降現在までの 48 件）の内訳を眺めてみると、表のごとくです（表参照）。これらの概観から、筆者の気づいた主な特徴の一端を示してみると次のとおりです。

- (1) 定年に近い時期に至り、子どもたちも社会的、生活的に巣立った時点で事故を生じます（気持ちの張りが低下し、年齢の影響も顕著に出たものと解されます）。
- (2) 社会・経済等の影響を受け、50 歳くらいの年齢に至り、転職して職業運転者に就いた人が広義の不適応のゆえに事故を生じる傾向が顕著です。夜間走行の多い生活になかなか適応ができにくく運転にも不慣れで、疲労も大きく、その回復の遅いことも主要因として挙げられましょう。
- (3) 40 歳前後の運転者の場合、年齢的な体調変化が生じているのに気付かず、それ以前の若い時と同様の仕方で走行・作業に従事し疲労の影響でミスを生じたり、あるいはまた、マンネリ化によって危険感の低下が生じ、ミス惹起に至っているようです。（他省略）いろいろな場合を通して緊張がゆるんだ時、（たとえば、職業人生の終わり際、一日の走行が終わってきた時、あるいは、目的地に到達した時、等々）、に事故惹起が多く看取されます。

応用心理学的にみた更なる課題

NASVA が行っている業務内容について、応用心理学的視点で広い視野のもと展望してみた時、眼前に去來した種々の問題点、願望などのうち、若干のものを例示的に記しておきます。

(1) 適性診断について

名古屋主管支所はじめ全国に展開して各支



診断受付風景



診断結果についてのカウンセリング

個別受診中

所では実務中心ですが、東京に所在する本部では外部の専門家の支援も得つつ、現行業務内容の改良・改善や将来に向けての研究開発が可能で、その着手が望まれています。

その例示の一部を挙げるならば、次のとおりです。①適切な運転行動モデルに基づく新テストの開発と、平行テストの作成（現行テストについても同様ですが…）、②現行診断受診後のフォローシステムの確立と安全マネジメントとの緊密化（各企業等においては、受診者一人ひとりに対して受診結果を活かした安全運転の実施状況や更なる助言指導をすることが必要視されていますが、現実は、人員削減で人手不足であり、各受診運転者の自主的活動に委ねられています。せっかくの診断受診の成果をいっそ効果あらしめるための対処法が、システム的にも社会的にも求められています）。

(2) 他の業務について

当機構の業務については、適性診断の他に、種々のものがあります（前出参照）。いずれも、応用心理学的にみて重要な内容に関係しているものであり、「現実と直結」している部署での活動だけに、より多くの専門家の配置と、より強力でより深い専門的知識・技術の活用が望まれていますが、人員も少なく、今後の課題として残されています。

CROSSROAD

私と応用心理学 ESSAY

4

応用心理学と社会貢献

はじめに

私は、就職に当たって、「心理学を生かしたい」という希望を強くもっていたため、心理職技官として、防衛庁（現 防衛省）に勤務（1959～1997）することになった。

当時、官庁や企業等で、心理職を採用するところは大変少なかった。防衛庁以外では、労働省少年局（現 厚労省）、通産省（現 経産省）の研究所、家庭裁判所の調査官であった。臨床系以外の仕事を選択したいと考えていたので、立川にある航空医学実験隊を希望したが、当初は、本庁勤務が決まり、15年間、防衛庁本庁（現在の経産省の建物）のある霞が関駅まで通勤した。その後、念願かなって立川へ移動することになり、定年まで勤務することになった。「航空医学又は航空心理学の立場から空自に必要な調査研究を実施する」がミッションであった。当時は、かなりの自由度があり、学会での発表や学会等による研究会も旅費は払われないが自由に参加できた。空自のためにもあり、かつ学術的にも優れた研究を実施すること、これが当時のコマンダー、故大島正光先生のモットーであった。

はじめから応用分野へ

応用か基礎かについてはよく議論の対象となるが、心理職としての仕事は、まさに研究対象が応用の分野ということになった。かつて坂野先生が述べられていた様に、応用とは、対象がいわゆる現場であり、それが実験室内のみの対象ではないということであり、方法は基礎に基づいていると言える。

「航空分野」、それも航空自衛隊という組織のなかであるため、はじめから「応用」の分野に飛び込んだことになる。先ず組織には制服組と制服を着ていないシビリアン（Civilian）とが存在し協調して働くことに

なる。私はシビリアンの研究職としてスタートした。当初は、組織の理解だけではなく、航空システムを理解するのも大変であった。パイロットだけではフライトは成り立たず、航空交通管制官という職種も興味ある職種として初めてそこで遭遇した。職種の理解に苦労したお陰で、後に航空・鉄道事故調査委員会委員（現 運輸安全委員会委員）になった際は、ここでの経験が、非常に有効に働いた。

応用研究例

航空医学実験隊で実施した2、3の応用研究例を次に示したい。

1) 実験室実験から実機による確認

滑走路脇にある滑走路距離標識の見えやすさに関する実験。滑走路脇に設置され、あとどれだけ滑走路の長さがあるかをパイロットに知らせるための標識である。どの様な文字と背景の色彩の組み合わせであれば読みやすいかを知るための実験であった。先ず実験室内で、文字を白色とした方が読みやすいことをタキストスコープにて確認し、背景を赤、黒、水色、文字が黒色の背景を黄色とした場合の4種類を作成し、実機によりタッチアンドゴー（着陸復航）を何回か繰り返してもらい、一対比較法で標識を比較してもらった結論は、文字は白色、背景は水色が逆光であれ、順光であれ、「読みやすい」という評価を得た。赤色の背景は、誘目性という意味では水色より優れていたが、読みやすさでは、水色に次いで2位であった。当時のチーフは、現中京大学名誉教授の神作博先生であった。

2) 長時間フライトが生体に及ぼす影響について

当時（80年代後半）、空自では国際線としての運用はなかったため、国内の空自の定期便のなかで、最も距離の長い、入間—福岡—那覇—福岡—入間の便に同乗し、クルーと一緒に移動しながら、データを取らせていただいた。ワーカロード測定の指標は、主観評価と客観評価を用い評価した。客観評価として、心拍数（拍／分）とここ

垣本由紀子

(日本ヒューマンファクター研究所
・立正大学大学院心理学研究科)



かきもと・ゆきこ●
早稲田大学を卒業後、
心理職技官として防衛庁入庁。本庁勤務後、航空医学実験隊勤務(1961～1997)。防衛庁退官後、鹿児島県立短期大学教授(1997～2000)を経て実践女子大学教授(2000～2007)。この間、航空・鉄道事故調査委員会委員を2期6年兼務。立正大学大学院(非常勤)(2004年～今日まで)勤務。兼て、日本ヒューマンファクター研究所勤務(安全人間工学担当、2007年～今日まで)。医学博士(1985)

で初めて唾液コルチゾールを用いた。コルチゾールは、ストレス指標として知られているが、これ自身の日内変動があることに留意が必要であった。心拍数の連続測定は、パイロットへの負担となるが、フライトの難易度及び経験の度合いとに、非常によく対応して変化し、測度として極めて適切であった。

3) 断眠が操縦パフォーマンスに及ぼす影響 (90年代後半)

テストパイロット3名に被験者になっていただき、シミュレータにより断眠の操縦パフォーマンスへの影響について実験を実施した。断眠後の午後にエラー率が上昇すること等が確認された。

4) 人体計測の実施(80年代後半)

パイロット、整備員を対象に、人間工学的設計に必要な項目を測定することを目的に人体計測を実施した。本データブックは、モノづくりに携わる企業などからの引き合いが非常に多く最も有効に利用されたと考えている。本計測は10年ごとに実施されており、私は第3回目の担当であった。婦人自衛官を対象としたはじめて女性のデータが加わった。

人体計測は、約120項目の測定を行うが、使用する器材は解剖学者マルチン先生の考案になるマルチン式計測器を用いた。特徴は、人間の皮膚の表面から触れてわかる骨を計測ポイントとして使用することである。骨の名前と測定点としての位置を覚えることが非常に大変であった。

応用心理学を生かした社会貢献

社会的貢献として、幸いにも、大学教育に携わったことと、もう一つは航空鉄道事故調査委員に選ばれたことにより、航空安全から広く安全の分野へ目が向けられたことである。

航空・鉄道事故調査委員会委員は、2001年2月から2007年2月までの2期6年間務めた。委員会の仕事は、航空事故調査官により作成された航空事故調査報告書案に

ついて徹底した審議を行うことである。私の担当は、ヒューマンファクターの領域であるが、この領域及び女性では事故調査委員会が設立(1974年)以降初めての採用であり責任感が極めて大であった。このなかでのヒューマンファクター的なアプローチこそ、まさに応用心理学であると私は考えてきた。6年間で、142件の航空事故が発生したが、最も時間をかけて審議してきた事故は、2001年1月31日に発生した日航機同士のニアミス事故であった。事故のきっかけは、訓練中の航空交通管制官のコードサインの言い間違いという誰にでも起こりうるヒューマンエラーであり、ヒューマンファクター的アプローチが広く求められる事例であった。上昇中のA機が、降下をすることにより、降下中のB機と異常に接近し、衝突を避けるため、A機が急降下し、B機の下をかいくぐり急上昇したため、9名が重傷、91名が軽傷を負った事例である。

航空事故とCriminalization

本件に対し、2010年10月26日、最高裁は刑法を用いて有罪判決を下した。執行猶予3年の禁固罪である。本判決は、「ヒューマンエラーは裁けるか」という問題を提起した。エラーは、意図的に行ったものではなく、結果としてエラーになった事象を、意図的に行った犯罪と同じ扱いにするのはおかしいではないかと多くのヒューマンファクターの関係者は考えている。

応用心理学に身を置いたものとして、この問題は、まだ解決に至っていない。また、航空事故と「Criminalization」は、米国においても問題になっている。この問題は、軽々には解決に至らず、応用心理学の一つの問題として今後とも取り組んでいきたい。

注：ニアミスであっても搭乗者のなか、1名でも重軽傷が発生すれば、事故として扱う

第6回国際心理療法会議（6th World Congress for Psychotherapy 2011）は、2011年8月24日から28日にシドニーのConvention and Exhibition Centreで開催されました。

大会テーマ

- 1) 心理療法の現在の課題／行政と心理療法
- 2) 訓練・教育・スーパービジョン
- 3) 神経科学と研究
- 4) 家族と親族
- 5) 倫理的・哲学的課題

海外最新事情

第6回 国際心理療法会議 参加報告

林潔

（白梅学園短期大学名誉教授）

- 6) 需用者フォーラム
- 7) 文化と先住民
- 8) スピリチュアリティ

基調講演

トラウマと精神病理、イメージ療法、幼児一母親関係などがテーマです。PTSDでは、虐待の問題が中心です（例：Warwick M. Middleton: "Always daddy's little girl: incestuous abuse during adulthood.）。

東西の心理療法モデルを対比し、理論の発展を図ろうという動向があります（例：Harlene Anderson: The heart and spirit of collaboration therapy: the philosophical stance）。これは3年

ごとに開催されるこの会議が、2回連続してアジアで開催されたこととも関係するでしょう。ちなみに前回は北京で、前々回は自律訓練法の佐々木雄二先生が中心となり、東京（立正大学）で開催されました。心理療法のモデルを、人間の普遍性を基本としながらも、文化の条件とどのようにかかわらせるか。古くは新フロイト派、近くはマイクロカウンセリングのアイビー（A.Ivey）の指摘など、長く論議されている課題です。心理療法と文化の問題がクローズアップされている最近の背景には、中国への心理療法の普及と無関係ではないと思います。中国には個人の問題を家族・周囲という集団とのかかわりで対応するという伝統があります。そのために西欧的な取り組みとのギャップが残ります。

シンポジウム・口頭発表

背景を分類すると、ナラティブセラピー、家族療法、精神分析、認知行動療法、実存的かかわりが目につきます（ナラティブセラピーは、ここオーストラリアで生まれました）。芸術療法関係では、絵画によるアプローチが多いです。そして複数の種類の療法を、意図的に併用するという動向もみられます。たとえば絵画療法を中心しながらも、積極的に音楽を活用するという方法です。このような多面的な方法は、今後さらに発展するでしょう。また、ITによる試みが報告されています（Dighy Tontam: Online psychotherapy: now and future）。広大なアメリカ、オーストラリアや中国では、ITによるケアの方法に関心が持たれています。会議の一つのテーマであるスピリチュアリティの背景には、キリスト教と併せて、仏教をベースとした発表も目立ちます（例：Eng-Kong Tan: What is Buddhist psychotherapy）。対象事例は、神経症、精神病関連です。

個人発表

個人発表は、先のメルボルンでの国際応用心理学会議と同様に、eポスターで行われました。会場では数台の端末から閲覧します。内容は、必ずしも病理に限定されず、多岐にわたります。

||全体の印象

1) 心理療法の活動は医療機関との直接のかかわりで行われる場合と、そうではない場合とがあります。特に心理療法の歴史の浅い国では後者の活動の定着に懸念があります。

2) 心理療法とエビデンス 周知のように証拠にもいろいろな水準があります。心理テストも活用されていますが、特に生理的指標の提示が有利になっています。

3) 変動する社会とのかかわり。家族と近隣の機能の変動を促す条件が加速しています。社会的変動の影響を心理療法で受け止めることの限界もあります。

4) 養成 歴史の浅い国ではセラピスト／カウンセラーの養成プログラムが、まだ十分とはいいません。アジア地域では、欧米に留学した人たちが養成活動の中心になっていると思われます。またオーストラリアも英連邦との関係もあり、地域のセラピストの養成に大きな役割を果たしています。そのようなことから、それを自国の文化に合うようにこなして活用することが課題です。

5) スーパービジョン 歴史の浅い国は、まだ手が回らないというのが現実でしょう。ただ、このような状況が、否定的な社会的評価を受ける余地をつくると危険です。

6) 心理療法・カウンセリングの営みは、クリニック・相談機関における活動と、教育、産業、福祉、看護などの現場の活動という2つの方向があります。特に後者への支援が課題です。

7) 効果的な手続きの模索 現場の人たちは、当面する問題へかかわる有効な方法論を求めています。地域を超えた情報交換の機会がさらに求められます。

8) アジアからの発信 アジアからの発信は、欧米にとっても刺激となるはずです。ちなみに、認知行動療法の最近の動向と理解されているマインドフルネスには、東洋の瞑想研究と実践とが多くの影響を与えています。

9) eポスターは会場に行かなくても発表可能という便利さがありますが、その分会場への参加者は少なくなります。直接の会話の機会が失われ



林 潔 (はやし・きよし) ◎1961年立教大学大学院応用心理学専攻修了。白梅学園短期大学名誉教授。常磐大学人間科学部非常勤講師。日本行動医学会理事。オーストラリア・ニュージーランド学生相談学会名誉会員。中国陝西省心理諮詢師協会名誉顧問。

るので、ポスターを前にした討論の熱気がかけを潜めてしまうのも残念です。

政治的指導者同士が激しく対立する国の人々も、類似の問題に悩み、取り組みの方法を渴望しています。

なおこの報告は、参加したセッションを中心としましたが、未傍聴の報告はプログラムで補いました。

プログラムとアブストラクトは <http://hosted.arinex.com.au/wcp2011abstracts> から閲覧可能です (パスワード WCPAbstracts2011。期限については未確認)。なお次回は 2014 年、南アフリカで開催されます。

会場には前回の主催国であった関係もあってか、中国からの参加者が目につきました。

会場のコンベンションセンターは、1988 年に国際心理学会が開催された場所です。ここダーリングハーバーには、散策の人々が行き交い、かもめが舞い、遊園地用の汽車が走っています。都心からの小型のモノレールが開通したほかは、当時とは変わらないたたずまいです。

-
- 1) Godfrey St. Bernard, et al: Major Trends Affecting Families in Central America and the Caribbean. 2003.
 - 2) Property of the Ministry of Education, Human Resource Development, Youth and Sports: St. Lucia Education Statistical Digest. 2005
 - 3) The National Assessment Team of St. Lucia: St. Lucia Country Poverty Assessment 2005/2006.

BOOK REVIEW

本を出しました

『(看護・介護・保育の心理学シリーズ)第4巻 生活の質を高める教育と学習 —よりよいヒューマン・ケア実践をめざして—』岡堂哲雄=監修



2011年1月発行
新曜社
本体価格2200円

このテキストは、看護・介護・保育の現場で実践に携わっている方のために、有益な示唆に富むことを目指している。心理学の基礎を押さえながら、よりよいヒューマン・ケア実践に資するために「総論」「生涯発達」「慢性疾患から障害へ」「コミュニティ」という4つの軸をたて、日頃からヒューマン・ケアに専門的に従事している経験豊かな14名の先生方に執筆いただいた。さらに、各章の終わりに「参考書」と「レポート課題」を配置しており、ヒューマン・ケアに関わる心理学の基礎的な知見を得ることにとどまらず、より

よいヒューマン・ケア実践につながるように、内容を配慮している。看護師・介護福祉士・保育士を目指す方や、日々の実践で悩んでいらっしゃる方が、心の問題についての基礎的知識と実践的技法を的確に習得でき、医療・保健・福祉のサービスを受ける方の生活の質を少しでも高めることに、つながればと願っている。

廣瀬清人●聖路加看護大学看護学研究科教授。専門は、集団パラダイムからみた昔話の心理学的研究。

『相談援助実習・実習指導(現代の社会福祉士養成シリーズ —新カリキュラム対応)』米本秀仁・久能由弥=編著



2011年2月発行
久美
本体価格2700円

本書は、社会福祉士養成に必要な実習科目のテキストである。

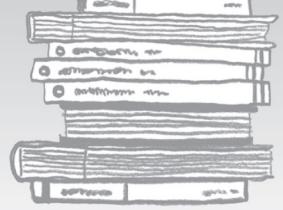
社会福祉士及び介護福祉士法が制定されて24年になるが、20年目に当たる2007年に法改正があった。人々の生活の在りようの変化に伴い、福祉ニーズが複雑化・多様化してきているなかで、高度な専門性が求められるようになったことが背景にある。

教育課程では実践力の向上という大目標が掲げられ、カリキュラムが見直され、実習と演習がいっそう重視されるようになった。福祉の対象は選別された一部の対象からあらゆ

る対象へと拡大し、支援も福祉施設が主であった時代から地域へのシフトしてきた。したがって、あらゆる対象者の複雑・多様な福祉ニーズに対し一定の専門性を持って福祉に関する相談に応じ福祉援助を展開できるような高度なジェネラリスト養成を目指すことが求められる。

本書は新カリキュラムが重視する実習を学生向けに丁寧に解説した一冊である。

久能由弥●北星学院大学社会福祉学部准教授。専門はソーシャルワーク理論。



『生涯スポーツの心理学

—生涯発達の視点からみたスポーツの世界』杉原 隆=編著



2011年4月発行
福村出版
本体価格2800円

本書は、乳幼児期から中高年期にいたる発達に応じたスポーツのあり方を見通して、相互に関連づけて考えたいという意図で全22章から構成されている。発達期として大きく乳幼児・児童期、青年・成人期、中・高齢期に分け、それぞれの発達期の中核となる主要なトピックを章として取り上げられている。それぞれの発達期における特徴的な事柄を中心に内容を記述するとともに、その他の時期との違い、とくに発達的特徴の質的な違いについても触れられている。運動学習の基礎理論とその応用、スポーツ参加の動機、運動と人

格的発達、運動スポーツによる体力と健康の保持増進、スポーツ運動の認知機能への影響などについて、各世代ごとにまとめられている。

超高齢社会の現代において、健康づくりの大きな柱としての運動スポーツの実践の意義はその重要度を増している。生涯スポーツの学習者、指導者には必読の書である。

谷口幸一●東海大学健康科学部教授。
専門は生涯発達心理学、スポーツ心理学。

『幼稚園・保育所・児童福祉施設実習ガイド

—知りたいときにすぐわかる』石橋裕子・林 幸範=編著



2011年5月発行
同文書院
本体価格2000円

保育士資格や幼稚園教諭免許を取得する際に重要なのが、保育実習や教育実習であり、近年その比重は増している。しかも、学生にとってもこの実習は、さまざまな点で重くのしかかっている。さらに、学生は、実習の場である保育所や幼稚園は知っているが、児童福祉施設は知識でしか知らないことが多く、そのため疑問や質問も多い。そこで、児童福祉施設の実習を中心に、この『実習ガイド』を執筆した。この『実習ガイド』は、保育所や幼稚園での実習のポイントや児童福祉施設での実習のポイントだけではなく、近年増加

している『認定こども園』での実習のポイントについても解説をした。さらに、現在小学校などで実施されている特別支援教育を考慮して、保育所や幼稚園の軽度発達障害の子どもなどの障害児についての援助・指導なども解説した。

林 幸範●こども教育宝仙大学子ども教育学部教授。専門は教育心理学、発達心理学、特別支援教育。

BOOK REVIEW

本を出しました

『わかりやすいMMPI活用ハンドブック

—施行から臨床応用まで』日本臨床MMPI研究会=監修



2011年7月発行
金剛出版
本体価格3800円

本書で、しっかりと目を通して欲しいのは症例呈示である。経験豊かで著名な先生にも協力を頂いたが、ほとんどは臨床経験が10年に満たない若い臨床心理士による報告である。未熟で拙いかもしれないが、臨床家としてMMPIを用いながら、心理的な弱さや強さを理解し、好ましい治療的介入を考えながら患者に総合的で全体的な関与をしていくとしている様相が描かれている。日常臨床で関わる患者に、迷い苦しみながらも専門家として懸命に全身で向かい合っている臨床の原点といえる真摯な姿が見えてくると思う。

MMPIはロールシャッハとならんで、総合的に人間を理解でき、さらに関わっていける臨床心理検査（ツール）である。日本ではロールシャッハと比すとほとんど利用されてないといえるMMPIではあるが、初心者にも臨床的な施行から解釈まで行えるよう記されている本書が、今後の日本におけるMMPIの臨床的活用の発展に少しでも役立つことを願う。

井手正吾●札幌学院大学人文学部教授。専門は臨床心理学。

『京都人が北海道に住みついたワケ

—社会心理学者が探る北海道の真の魅力』濱 保久=著



2011年7月発行
共同文化社
本体価格1286円

京生まれ京育ちの著者が30年前に来道し、ついには住みついてしまったワケをエッセイ風にまとめた本である。旧の典型京都から新の典型北海道にやってきてしばらくは驚きの連続であったが、北海道には京都と対照的な生活と文化があり、好奇心のみならずその潜在的可能性に魅せられたからこそ私はここに住みついた。生活体験から生まれた疑問を観察、実験、インタビュー、フィールド調査などによって明らかにし、その原因や背景を比較文化論的に考察している。内容は冠婚葬祭、催事、消費生活、アウトドア、スポーツ、

食、住まい、言葉、つき合い、接客、女性など多岐に渡っているが、つまりところ北海道の最大の魅力は気楽さ、すなわちいい意味でのアバウトさ、いい加減さである。まだまだすべてが流動的で固まりきっていないからこそ許されることがいっぱいある。型にはめられない、なんでもありの精神と自由が北海道には無限にあることを知ってもらいたい。

濱 保久●北星学園大学文学部教授。専門は社会心理学。



『犯罪者プロファイリングは犯人をどう追いつめるか』

桐生正幸=著



2011年7月発行
河出書房新社
本体価格760円

本書は、近年、研究が進み犯罪捜査現場での運用も進展しつつある「犯罪者プロファイリング」の一般入門書（新書版）である。執筆にあたり、①一般の読者、初学者に親し易いこと、②映画やアメリカTVとは異なる、日本の実際の姿を描くこと、③地味で華々しくはないが、確実に役に立っている現状を伝えること、などを留意した。そのため、理論や専門知識とともに、自身の犯罪者プロファイリング経験や研究に関する逸話もいくつか記載した。また、TBSドラマ「LADY」（2011.1～3放映）の登場人物「結城」の若

き日の活躍を想定したフィクションを通じて、実際の事件捜査における活用も表現してみた。集中講義の副読本として活用したところ、学生の評判も良かったので、まずはまずの出来と思っている。

本書が「犯罪者＝異常者」のイメージを払拭し、たとえば消費者行動と同じように、さまざまな分析の可能性があることを伝えられれば、と願っている。

桐生正幸●関西国際大学人間科学部教授。専門は犯罪心理学。

『心理学とは何なのか

—人間を理解するために』永田良昭=著



2011年8月発行
中央公論新社
本体価格840円

心理学の研究で取り上げられる問題は、最近ますます大きな広がりを見せている。現実の生活からさまざまな問題が見出され、それが研究の広がりをもたらしている。人間の行動を生態的な流れのなかで捉えるという意味でも、これは、歓迎すべきことである。しかしその広がりは、心理学という共通の旗印のもとで筋道の通った人間像を描くものとして総合できているのか、と聞かれると答えに窮する。総合の試みはほとんど見られない。総合が必要だと考えるとすれば、心理学という名称に何の意味があるのであろうか。

本書は、予備知識をもたない読者を前提として、さまざまな研究が心理学という共通の旗印のもとに総括される共通点は何かについて、心理学が、何を素材として、どのような論理で人間を理解しようとしているか、という視点から整理を試みたものである。すでに心理学の世界に住む方々にも、それぞのこれから行き先と過去の足跡を整理する手掛かりとして役立てて頂けるなら執筆者冥利に尽きるとの思いも籠めたつもりである。

永田良昭●学習院大学名誉教授。専門は心理学、社会心理学。



心理学から見たおすすめDVD紹介

DVD『ヒロシマナガサキ』

(WHITE LIGHT / BLACK RAIN : The Destruction of Hiroshima and Nagasaki)

©2007年、スティーヴン・オカザキ監督

◎本編86分(+特典26分)、カラー(一部モノクロ)、定価2,940円(税込)

発売・販売元:マクザム

©2007 Home Box Office, Inc. All rights reserved



本作品は、日系三世の米国人であるスティーヴン・オカザキ監督が14人の広島・長崎の被爆者と4人の原爆投下に関与した米国人の証言を軸に、25年の歳月をかけて完成させたドキュメンタリーです。

ステレオタイプへの気づき

「原爆のことは知ってると思っていたけれど、この映画で再発見し新しいことを学んだ」という日本人の声を監督が紹介しています。日本人は「原爆？何を今さら」という反応になりがちですが、その言葉の後ろにあるのは〈昔の戦争中の日本人の悲惨な被害体験〉というステレオタイプ的認識なのではないでしょうか？戦後生まれの日系三世の米国人であるオカザキ氏がいわば外側から描いていることによって、日本人は自らの固定的認識枠組みを意識化させられるように思われます。

1931年の満州事変を伝える米国ニュース映像から始まる本作品は、日本人が見落としがちの広島以前=アジア侵略に注意を促し、韓国人被爆者の証言はこれが日本人の被害物語にとどまらないことを問いかけます。他方、原爆を投下した当事者である米国側からも光を当てるこにより、ヒロシマ・ナガサキの認識が多角的なものになってきます。

また、学校教育やマスメディアでは触れることがほとんど無い身体に深く刻み込まれた傷、さまざまな差別、出産異常、肉親・知人の自殺、晩発性の病気の恐怖など、被爆後から今日までの半世紀以上にわたって被爆者たちが直面してきた多様な問題も浮かび上がります。

さらに、人類が「パンドラの箱」を開けてしまい核戦争の危険性と共に生きているという米国科学者の言葉や、広島型原爆40万発相当という核兵器の現状を告げるエンディングによって、日本人には戦争の「終わり」として記憶される広島・長崎が、核時代の「始まり」でしかも、私たちが現実との直面を避けているということにも気づかせられます。

本作品を通じて、広島・長崎についてのステレオタイプ認識を、今現在に連続するローカルかつグローバルな

ヒロシマ・ナガサキ問題へと組み替えることが可能となるでしょう。

苦難を乗り越える条件について

約90分にわたって身体と心、生活・人生に刻まれた傷の語りに向き合っていると、「にもかかわらず」その方々がここまで来られたことを可能にしたものが何であったのか、という問い合わせが生まれてきます。これは臨床心理学やコミュニティ心理学、平和心理学といった諸分野にとってとりわけ重要な課題と言えるでしょう。肉親の支え、カトリック信仰、米日政府への憤り、米日市民の共感、使命感、被爆者同士の支えあい、「生きる勇気」の選択など、一人ひとりの関係のなかにあるキーワードが見え隠れしていますが、結論的なことは明示されていません。こうした問いは、今日、貧困問題や3.11大震災・原発事故という大きな苦難のなかで内的・外的コンフリクトを克服して生きていく課題とも重なるように思われます。近年のポジティブ心理学などのアプローチにも着目しながら、14人の被爆者の語りの奥にあるものを注意深く聴き取りたいという思いに駆られます。

フクシマ以後のリアリティー

筆者は3.11以後のフクシマ原発事故の前・後で自分の本作品に対する見方が変化していることに気づきました。爆心から何キロ圏にいたのか？何シーベルトの被ばく線量だったのか？放射能雨に当たった人はどうなったのか？汚染された水・食べ物を知らずに食べた人々の内部被曝は？直ちに健康被害が無かった人々が10年20年経って発病したが……いまこれを観る人にはさまざまな問い合わせが浮かぶことでしょう。監督インタビューでは、本作品が9.11事件（2001年）以後の軍拡状況下公開されたことで関心を集めたことが述べられていました。その10年後、3.11事態のもとで原爆と原発の双方がリアリティーを増していることを実感します。

作品の公式サイトもご参照ください。

<http://www.zaziefilms.com/hiroshimanagasaki/>

杉田明宏

すぎた・あきひろ◎大東文化大学文学部准教授。専門は平和心理学・平和学。著書・翻訳に『語り継ぎ未来を拓く平和心理学』(共著、京都法政出版)、『平和を創る心理学』(共著、ナカニシヤ出版)、『平和の文化8つのキーワード』(共著、平和文化)、『子どもと偏見』(アブード著、共訳、ハーベスト社)等がある。

F・E・フィードラーの履歴、業績および思い出 (その2)

白樺三四郎

(大阪経済大学人間科学部客員教授／大阪大学名誉教授)

6. リーダーシップ効果性の条件即応モデル

フィードラーは、やがてイリノイ大学においてリーダーシップ研究に本格的に取り組むようになる。最初の研究は、高等学校バスケットボール・チームについて行われ、インフォーマル・リーダーに最も苦手とする仕事仲間（これまでいっしょに仕事をしてきた人々のうち、いっしょに仕事をすることが最も困難であると思われる特定の人々、Least Preferred Coworker）を「楽しい—楽しくない」、「友好的—非友好的」、「受容的—拒否的」、などの8段階、18項目のセマンティック・ディファレンシャル形式の尺度に回答することを求めた。最も苦手とする仕事仲間を肯定的、ポジティブにとらえる人は「高 LPC」、逆にこのような仕事仲間を否定的、ネガティブにとらえる人は「低 LPC」と呼ばれる。その結果、業績のすぐれた集団のインフォーマル・リーダーは低 LPC の傾向にあることが見出された。大学生の土地測量実習チームについてもまったく同一の結果が見出された。(Fiedler, 1954)。のちに「高 LPC」は「関係動機型」、「低 LPC」は「課題動機型」と解釈されるようになる (Fiedler, 1972; Fiedler & Garcia, 1987)。

フィードラーおよび彼の共同研究者（複数）はリーダーの LPC と集団効果性との相関を軍隊、企業、大学などの各種集団について分析し（10年間にもわたる）、1964 年に「リーダーシップ効果性の条件即応モデル」（contingency model）と

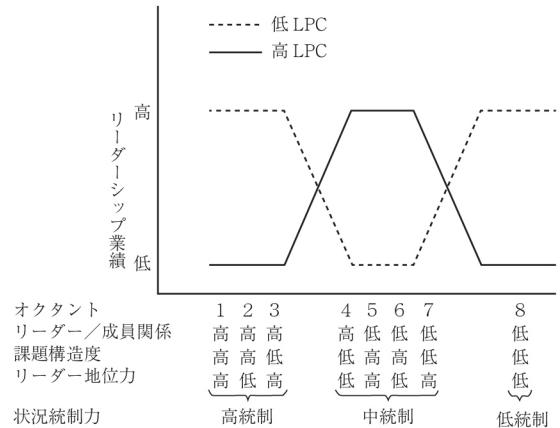


図1 フィードラーのリーダーシップ効果性の条件即応モデル概念図 (Fiedler & Garcia, 1987 の Figure 6.4 と Figure 8.2 を統合して作図).

彼自身が名付けた斬新な理論モデルを提唱するに至る（Fiedler, 1964）。

図1に示されるように、リーダーが集団を十分コントロールできるような状況（「高統制状況」と呼ぶ）あるいはリーダーが集団をコントロールすることが困難な状況（「低統制状況」と呼ぶ）では低LPC（課題動機型）リーダーが有効であり、リーダーが集団をコントロールすることが容易でもないが、困難でもない、中間的状況（「中統制状況」と呼ぶ）では高LPC（関係動機型）リーダーが有効である、という仮説がこれである。ここで高LPC人物の基本的（1次的）欲求は対人関係の維持であり、周辺的（2次的）欲求は課題の遂行である。これに対して低LPC人物の基本的（1

次的) 欲求は課題の遂行であり、周辺的(2次の)
欲求は人間関係の維持である(Fiedler, 1972; Fiedler & Garcia, 1987)。フィードラー、チェマーズらはこの理論モデルにもとづいた新しいリーダーシップ訓練を開発した(Fiedler & Chemers, 1984; Fiedler, Chemers, & Mahar, 1976)。この理論をめぐって長年にわたり論争が繰り返されてきた(白樺, 2003)。

7. 認知的資源理論

フィードラーは1959~1983年にわたる研究データ(既存のデータの再分析、あらたに実施された調査、実験の両者を含む)から、「認知的資源理論」(cognitive resource theory)と名付ける壮大な理論を提唱した(Fiedler, 1995; Fiedler & Garcia, 1987)。この理論は次の2つの前提と7つの仮説から構成されている。

- [前提1] 知的に有能なリーダーは効果的な計画、意思決定、行動戦略をとるであろう。
- [前提2] リーダーは仕事指示的行動を通して、リーダーの計画、意思決定、行動戦略などを部下集団に伝えるであろう。
- [仮説1] リーダーが上司に対してストレスを感じていない場合のみ、リーダーの知能は集団業績とプラスの相関を示すであろう。
- [仮説2] リーダーが上司に対してストレスを感じていないという条件下で、仕事指示的行動傾向の強いリーダーの知能は集団業績とプラスの相関を示すであろう。
- [仮説3] 集団がリーダーを支持する場合、仕事指示的行動傾向の強いリーダーの知能は集団業績とプラスの相関を示すであろう。
- [仮説4] リーダーが非指示的で、しかも集団がリーダーを支持している場合、集団成員の知能は集団業績とプラスの相関を

示すであろう。

[仮説5] 課題解決において知的努力が必要とされる程度に応じて、リーダーの知能と集団業績との相関は高くなるであろう。

[仮説6] ストレスが高い場合、リーダーの経験は集団業績とプラスの相関を示すであろう。

[仮説7] リーダーの仕事指示的行動の程度はリーダーLPCとリーダーの状況統制力のレベルによって規定されるであろう。

ここで知能とは標準化された知能検査によって測定された指標を、また経験とはその組織における勤続年数によって測定された指標をそれぞれ意味している。上掲の〔仮説4〕における「集団成員の知能」とは集団成員(複数)の知能の集団あたりの平均値をもってその指標としている。フィードラーは多数のデータ分析の結果、上掲の〔仮説4〕を除いて他の仮説はほぼ支持されたと主張する。

〔仮説7〕の構成にはSample & Wilson(1965)データの筆者による再分析(Shirakashi, 1980)がかかわっているので、ここでふれておきたい。

図2に示されるとおり、高LPCリーダーは状況統制力が低下するにつれて(横軸で右側に近いほど)課題関連行動が次第に減少するのに対し、

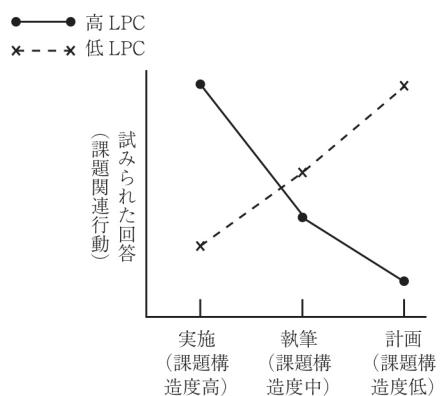


図2 さまざまな集団課題状況におけるリーダーLPCと行動の関係(Sample & Wilson, 1965の実験データのS. Shirakashiによる再分析; Shirakashi, 1980)。

低LPCリーダーは状況統制力が低下するにつれて、この種の行動が急速に増加する。この結果は高LPCが「関係動機型」で、低LPCが「課題動機型」であるという上述の解釈において用いられている。この認知的資源理論に関しても激しい議論が続いている（白樺、2003）。（続く）



白樺三四郎（しらかし・さんしろう）
1936年生まれ、九州大学教育学部卒業、九州大学大学院教育学研究科修士課程・博士課程修了、教育学博士。西南学院大学、鳴門教育大学、大阪大学、甲子園大学を経て、現在大阪経済大学人間科学部客員教授・大阪大学名誉教授。主著として「リーダーシップの心理学」（単著）、「産業・組織心理学への招待」（編著）、「社会心理学」（共編著）、「メンタルヘルスへのアプローチ」（共編著）、「リーダーシップ理論と研究」（訳編）、「リーダーシップの統合理論」（訳編）など。

参考文献

- Chemers, M.M. & Ayman, R. 1993 *Leadership research and theory: Perspectives and directions*. New York, Academic Press.
 （白樺三四郎訳編、1995 リーダーシップ理論と研究 黎明出版）
- Fiedler, F.E. 1950 A comparison of therapeutic relationships in psychoanalytic, nondirective, and Adlerian therapy. *Journal of Counseling Psychology*, 14, 436-445. (伊東博訳 1990 精神分析、非指示的方法、アドラー療法における治療関係の比較
 伊東博訳編 カウンセリングの基礎 (pp.239-261.) 誠信書房)
- Fiedler, F.E. 1954 Assumed similarity measures as predictors of team effectiveness. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 49, 381-388.
- Fiedler, F.E. 1964 A contingency model of leadership effectiveness. *Advances in Experimental Social Psychology*, 1, 149-190.
- Fiedler, F.E. 1967 *A theory of leadership effectiveness*. New York, McGraw-Hill. (山田雄一監訳 1970 新しい管理者像の探求
 産業能率短期大学出版部)
- Fiedler, F.E. 1971 *Leadership*. New York, General Learning Press.
- Fiedler, F.E. 1972 Personality, motivational systems, and the behavior of high and low LPC persons. *Human Relations*, 25, 391-412.
- Fiedler, F.E. 1992 Life in a pretzel-shaped universe. In A.G. Beedean (ed.) *Management laureates: A collection of autobiographical essays*. (pp.301-333.) Greenwich, CT: JAI Press.
- Fiedler, F.E. 1995 Cognitive resources and leadership performance. *Applied Psychology: An International Review*, 44, 5-28.
- Fiedler, F.E. & Barron, N. 1967 *The effect of leadership style and leadership behavior on group creativity under stress*. Technical report No. 25, University of Illinois, Group Effectiveness Research Laboratory.
- Fiedler, F.E. & Chemers, M.M. 1984 *Improving leadership effectiveness: The leader match concept* (2nd ed.). New York, Wiley.
- Fiedler, F.E., Chemers, M.M. & Mahar, L. 1976 *Improving leadership effectiveness: The leader match concept*. New York, Wiley. (吉田哲子訳 1978 リーダーマッチ理論によるリーダーシップ教科書 プレジデント社)
- Fiedler, F.E. & Garcia, J.E. 1987 *New approaches to effective leadership: Cognitive resources and organizational performance*. New York, Wiley.
- Hooijberg, R. & Choi, J. 1999 From Austria to the United States and from evaluating therapists to developing cognitive resource theory: An interview with Fred Fiedler. *Leadership Quarterly*, 10, 653-665.
- Sample, J.A. & Wilson, T.R. 1965 Leader behavior, group productivity, and rating of least preferred co-worker. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1, 266-270.
- Shirakashi, S. 1980 The interaction effects for behavior of least preferred coworker (LPC) score and group-task situation: A reanalysis. 西南学院大学商学論集, 27 (2), 27-39.
- 白樺三四郎 1985 リーダーシップの心理学：効果的な仕事の遂行とは 有斐閣
- 白樺三四郎 1994 フレッド・E・フィードラー：人と業績 大阪大学人間科学部紀要, 20, 71-106.
- 白樺三四郎 2003 リーダーシップ 白樺三四郎・外山みどり編
 社会心理学 (pp.171-195), 八千代出版
- 白樺三四郎 2006 リーダーシップ研究史における三隅二不二
 とフレッド・E・フィードラー, 甲子園大学紀要, 34, 157-172.
- 白樺三四郎 2008 思い出の心理学研究者 甲子園大学紀要, 36, 193-210.

■はじめに

人間の心は深く繊細です。その裏を探求する心理学の分野は多岐にわたります。

私どもでは、色を介することで、感受的で視覚的にも検証、確認しやすく、安定した心理学の応用を心掛けています。

①専門知識を持たない教職者を含む各分野の教示者を対象とします。日々直面する諸問題において、対峙者の心象変化に気付き、心傷の早期発見を可能にします。特に見えにくいとされるいじめや、家庭内暴力などの深刻化を予防する役割を担います。

②カウンセリングにおいて、環境把握を含む対峙者の正確な情報を早期に得ることで、信頼関係の構築をスムーズにします。

対応の是非が視覚的に確認でき、また、複数の指導者が介入するときも、一貫した見解と指導ができる利点があります。

③企業において、個性を理解する援助をすることで人材の発掘や問題解決の糸口など、有効な人事活用の手がかりとなります。

④生活者が、日常において色を「意識」することで、誰もが興味深く楽しみながら活用でき、より快適な生活空間の創造と、心身の健全化に関与します。

個々の心には幅があり、ましてや他者の心は万別であり、それらを一括してマニュアル化することには、不遜の念もあります。それでも、敢えて平板化することにより、底辺の枠組みを広げたいという、祈りにも似た願いを込め取り組んでいます。その最初となったのが、描画解析です。

■描画解析のきっかけ

終戦後、優に二百年を超えるという実家は焼け野原のなか、ポツリと取り残されたそうです。私は、その古屋で子ども時代を過ごしました。

家のなかは、骨董ならぬ古物に囲まれ、

応用力、展開力を兼ね備えた応用心理士に

名張淑子



なばり・よしこ ◎

1947年生まれ。心理学博士。応用心理士。著作権管理士。

デザイン管理士。著書『絵に映された心のSOS』(同朋舎角川書店)『子どもがわかる絵でわかる』(日経事業出版社)

『絵で見る心理解析ガイドブック 子どもの描画編』(日本生活医学研究所)『絵でわかる子どもの心』

学陽書房『マナ式描画の心理解析法 Vol.1 子どもの描画編』『マナ式描画の心理解析法 Vol.2 樹木画・まる画編』(明窓出版)

家人も古者でした。おかげで、幼いころから、おけいこ事は学業に勝るとばかりに重視されました。

それが幸いしてか、当時在住していたスペインの片田舎で、州政府による教職者対象の情操教育の担当に選任されました。なかでも、茶華道は、洗練された文化の統合であり、それらの奥に潜む宇宙的神秘性は、彼らに深い感受性と、想像力を培ったと思います。そんな背景もあり、スペインで生まれ育った2人の子どもたちには、日本人としての誇りや憧れがあったと思います。

しかし、大人の都合で、急きよ帰国した子どもたちに待っていたのは、異文化を持つ者への容赦ない「いじめ」という酷い現実でした。おりしも、中学生の大河内君が自殺をしたころです。例にもれず、ここでも教育の現場では、事実はないとされ、長年放置されたままでした。当時、小学一年に編入したばかりの幼い息子の痛みは、そのまま母のものでした。大河内君のご両親のように、突然「自殺」という現実を突きつけられる残酷さがあります。一方で、それらを知りながら手立てのない母への非情もあります。

息子の異様な一枚の絵の変化に気付いたのはそんなときです。単色、単線の絵はまるで息をひそめ、静止したかのようでした。絵に心が映されていることを立証できるなら、現場は納得せざるをえないのではないか。そんな思いから、描画の解析に取り組みました。解析が1万件に達したとき、一定の法則性があることを確信しました。

その時、すでに帰国から10年が経っていました。

■描画解析

今、時代は試練の時を迎え、出口の見えない不安材料に脅かされています。大人も

子どもも緊張感にさらされ、いじめや、虐待が増え続けています。その実態は見えにくく、不幸な結果を招くこともあります。描画は心象と直結しており、多くの情報を発信しています。私は、幼稚園や学校の廊下に無造作に掛けられた絵のなかから多くの情報を拾い、早期対応への援助をしています。

私たちの心の奥深くには、DNAによって最古のイメージが、延々と引き継がれ、同一の文化圏において、共通認識として一定の法則性を持ち、表現されることがわかっています。マナ式描画解析法では、これらの形状を精査し、分析への手がかりとするほか、画面配分や、色使用などを含め、さまざまな要素を分類し、体系化しています。

これら交差する情報は、より明確化され、描画対象者の生活背景までも映し出します。カウンセリングの現場はもとより、学校の保健室のように、対話が成立しにくい現場においても、落書きからも情報を得ることができ、対話がひらかれます。

初期対応において、対峙者に「理解されている」という安心感を与えることは、信頼への大きな一步となります。不登校の前兆や、生活の変化を知るきっかけにもなります。いじめに関しては、加害者も被害者も知ることができます。子どもたちの成長に敏感な幼稚園や学校では、指定のテーマに基き、定期的な作画を実施することで、変化を確認し成長を見守っています。指導過程においては、描画情報により、方向性の是非が視覚化され、修正や確認の示唆となります。この手法は、箱庭療法やコラージュ療法などの解析にも役立つほか、さまざまな応用ができます。

特に私どもが考案した指定課題「マナチャート」では、複合的な要素が、それぞれの確認となるなど、年齢や条件に関わらず描画が生活環境や潜在意識の投影であることを立証しています。なかでも、色の持つ要素は大きく、右脳と連携し感情を直接的に表現することが検証されています。そこで、色とは何なのか、なぜ、情感の直接的表

現となるのかを紹介したいと思います。

■色彩環境

色は、その種類を区別する色相のほか、明度、彩度によって固有色が認識されます。その際、色相が生理に、明彩度が心理に、より強く反応することが、私共の研究で明らかになっています。10万色の識別が可能といわれる私たちの視覚は、紫から赤に至る「可視光線」という極わずかな領域であり、ガンマ線、X線、紫外線、赤外線、電波、音波に至る電磁波<波動>の一部です。色の反応は、視覚による刺激だけではなく、波動との相互関係にあるのです。

さて、私たちの体は脈うち、地球の波動と同調しているとみられます。今回、その理論は省きますが、私たちの持つ波動と固有色の持つそれとが、共鳴、共振しあうことで、心身の正常化に関与しているとみられます。

描画表現においても、その時、その色を使わなければならなかった事由が明らかにされるのです。勿論、他の要素も注視しますが、形状などの構成要素は、主に生活環境などの客観的情報、色は、その時々の情感など主観的情報を示します。

日常においても、私たちは多くの体験をしています。何気なく選んだ服やネクタイを落ち着かなく感じ、終日、物憂げに過ごした経験は、意外と多いものです。色波動との不協和が原因とみられます。これらの現象は、錯視も踏まえ、自他へのマインドコントロールの一助として活用されています。アメリカでは、研究や応用も優れ、映画でも効果的に表現されています。大統領のネクタイにも、時々の想いを読み取ることができます。

さて、再び私事で恐縮ですが、私は長く母の介護をしてきました。母が健勝なときは、エレガントさを好みましたが、介護を必要としてからは、明るく楽しい衣服を選びました。穏やかな性格もありましたが、誰からも愛され、親しまれたのは、洋服を含む全体のかわいい印象にあったとおもいます。介護をする者も、される者も、明るい服

を着ることで、互いの心の負担が軽減したように思います。後に年配者ばかりの病院に入院することになりましたが、いかにもお年寄りらしい沈んだ雰囲気がありました。母の明るい部屋着は同室の方々から、やがてフロア全体に波及し、朗らかで暖かな雰囲気になりました。

気分の滅入るとき、明るさには違和感を覚えやすいものです。しかし、全体が華やかな空間になり、視覚的共有感が生じ、意識が明るさに向かうことで、共に楽しみ、全体の心理的負担を軽減したとみられます。それぞれが衣服として直接身に着けたことも感受的効果があったとみられます。

女性の多くは、まるで少女のように髪飾りをつけ、かわいさをアピールし楽しむようになりました。見舞いに来ない人や、痴呆の進んだ人のために、時々髪飾りを貸したり、リボンを作ったりするいたわる余裕も芽生え始めていました。もちろん男性にも影響があったことはあきらかです。厳しいリハビリで有名な病院でしたが、励ましあいながら、前向きな支えあいがありました。ほんの小さなきっかけでしたが、色が人々の幸せに貢献したことは、事実です。

このように、色と心身の関連は密接です。現在、私は母との体験を踏まえ、特に心身の負担を感じやすい病気や、高齢、障害など、リハビリや介護を必要とする病院や、ケアハウスの利用者、従事者の、快適な色彩空間の提供をめざしています。

■ 光と体内時計

私たちは、太古から光の恩恵を受け、それに順応するように生かされてきました。朝、昼、夕、そして夜と、日の出から日没、月光まで、移ろう色の変化のなかで暮らしてきたのです。日々、無意識のうちに折々の色光に刺激され、一定のリズムのなかで、長い年月をかけ体内時計を作り上げてきたとみられます。

ところが、エジソンが白熱電球を発明してから現代にいたるまで、科学はますます発達し、いつでも自由に光源が作り出せるようになりました。

おかげで、夜でも昼のような明かりのなかで社会は成長し続けています。人々は、昼夜を問わず仕事や、遊びに興じるようになりました。そして、少しずつ私たちの体内時計が崩れはじめてきたのです。非情緒的でキレやすく、利己的なストレス社会は、このような環境が作り出したのです。

勿論、木造から現代建築への変化によるストレスなど、複合的要因も明らかになっています。しかし、光との関連は、体内時計という原初的生命のリズムまでも脅かしそうとしているのです。

私どもでは、久保山初彦、宮地清和の両氏と共に、光と体内時計との関連について研究を重ねてきました。そして、自然光のごとく移ろう色変化を手軽に再現できる小型のLEDを開発し特許を取得しました。これを受け、現在、ケアハウスや医療の現場を含むさまざまな機関で、実験的な検証を進めています。これら、小型化されたLEDが、手軽に幅広く活用され、個々の体内時計を調整することで、ストレスを軽減する他、痴呆や寝たきりの方々の体調改善を目的としています。

節電が課題とされる現在において、LEDによって、安価で気軽に自然光を設定し、心身共に健全で安定した社会再生のために貢献していきたいと思っています。

■ 後輩に望むこと

今までの記述でお気付きのことだと思いますが、私どもの視点は常に日常性にあります。誰もが、ほんの少し意識を向けることで、恩恵をうけられる。そんな気付きを提供し、共に分かち合うことを喜びとしています。

今回、活動の一部を紹介させていただきました。母、そして、時には誰かの子としての立場から、気負うことなく、生活に密着した血の通う活動を今後も続けていきたいと思っています。

応用心理士とは、まさに応用力、展開力にあります。さまざまな体験を重ね、自らの周りに豊かな空間を創りあげていかれることを期待しています。

日本応用心理学会認定「応用心理士」 資格認定申請のご案内

「応用心理士」認定審査委員会

本誌の「応用心理士の現場」では、応用心理士資格を生かして活躍する会員の皆様をご紹介しています。多種多様な分野で心理学の知見を発揮される会員が1人でも多くなりますよう、ぜひ資格の取得をお勧めします。

本資格申請は、「学会入会後2年を経た」時点で可能です。

学会で認定する「応用心理士」は、会員の専門職としての資質があると認められた証明になります。

認定の要件は、「応用心理士」資格申請の手引き(第6版)に記載の通りですが、次の各号の1つに該当するかを踏まえ委員会で認定するものです。

- (1) 学校教育法において定められた大学または大学院において、心理学専攻又はこれに準ずる分野を卒業あるいは修了した者(学位授与機構の審査により学士の学位を授与された者も含む)。
- (2) 本学会機関誌「応用心理学研究」に1件以上の研究論文を発表した者、又は本学会の年次大会において2件以上の研究発表をした者。
- (3) 認定審査委員会が応用心理学と関係あると認めた専門職で、3年以上の経験を有する者。
- (4) 応用心理学と関係ある職で3年以上の経験を有し、本学会研修委員会企画の「研修会」に5回以上参加した者。

■ 資格申請の手続き

以下の順序に従って申請の手続きをお願いします。

- ① ハガキで「資格申請書類を希望する」と「返送先」を明記し、事務局まで請求してください。
- ② 申請書類の請求がなされると、必要書類が希望者に送付されます。受け取られたら、

申請書類に所要事項を記入し、同封の封筒で送付してください。

- ③ 審査料10,000円は、郵便為替で送金してください。

郵便振替の振込先

口座番号 00110-6-359059

加入者名 日本応用心理学会

(注)申請書類一式のなかに同封されている郵便為替用紙をご利用ください。

- ④ 提出する申請書類は次の通りです(提出の際確認してください)。

- ① 様式1(資格認定申請書)

(注1) 所定の枠内に証明書用カラー写真(ヨコ3cm×タテ4cm)を貼付してください。

(注2) 裏面に審査料の振込金受領証をコピーして貼付してください。

- ② 様式2-1(履歴書)

- ③ 様式2-2(業績書)

- ④ 「研修会」参加を資格要件とする場合は、「受講証明書」5回分を添付してください。

- ⑤ 認定委員会では、提出書類について審査し結果を文書にて申請者に通知します。

合格した人は認定料30,000円を納入してください。

入金されると「応用心理士」認定証を交付し、本学会機関誌「応用心理学研究」に掲載して公表します。

今年度後期の受付期間は、12月末日です。
2012年度前期の受付締め切りは、5月末日です。

日本応用心理学会認定「応用心理士」事務局

〒169-0075

東京都新宿区高田馬場3-8-1

東京富士大学応用心理学研究室内

E-mail: ukiya@fuji.email.ne.jp

機関誌編集委員会からのお知らせ

応用心理学会員の皆様には、機関誌「応用心理学研究」にいつも変わらないご支援・ご協力を賜りありがとうございます。

先般、日本応用心理学会第78回大会が信州大学松本キャンパスで開催されました。多くの研修やワークショップやシンポジウムが開催され、皆様の活発な議論が行われておりました。また、研究発表も口頭発表とポスター発表があり、会場は熱気に包まれておりました。さらに懇親会では、研究発表の優秀大会発表賞受賞の方の表彰が行われました。受賞された方は皆様輝いており、さらなる研究を邁進しようとする意欲に満ち溢れていらっしゃいました。受賞者の方の積極的な機関誌「応用心理学研究」への投稿に期待しております。

ところで、既に皆様ご承知と思いますが、総会において、来年度の機関誌編集の体制の変更について報告させていただきました。

まずは、機関誌の年間発行号数の増号です。近年、投稿数が増加しており、少しでも早く皆様の論文を機関誌に掲載するために、4ヶ月ごとに機関誌を発行して、会員の皆様へ掲載の機会を早くしたいと考えたからです。これまで、発行にあたっては、委員長と深澤副編集委員長と藤田主一副理事長補佐役と審査の6部門の部門責任者との協力体制で編集業務をすすめてきました。「編集事務局」に一括して投稿論文を受け付け、編集業務を行っておりますが、「編集事務局」は大変な作業量になっております。そのなかで、号数を増やすことは無謀とも取れますか、事務的な作業の補佐する短期アルバイトの雇用も視野に入れての判断です。少しでも会員の皆様へのサービスを向上させたいという思いからです。

このように、投稿数が増加しましたが、短報論文は査読過程も比較的スムーズなので、人気が高く、最近特に増加しております。しかし、原著論文、資料論文に関しては、時間が多くかかり、一部ご迷惑をかけている事例もございます。論文の質の担保をしながら、スピーディに査読をしていかなければなりませんので、非常に悩ましい点でございます。現在は、各部門責任者は適切な査読者2名を選定し、

査読を依頼しております。2名の査読者のうち1名が不採択の判断を下したときには、第3の査読者を立てて査読を継続するなど、審査の公平性も担保するよう努めています。その査読を行う審査期間ですが、査読状況によって異なります。1回修正の場合、約3~4ヶ月かかります。これは順調に経過した場合での目安なので、実際はもう少し時間がかかります。一度も連絡がないまま、時間だけが過ぎていったなどのご指摘も受けております。この背景には、適切な方は他の論文の査読者をしているなど、なかなか適切な査読者が見つからない、見つかってもお断りを受けるなどの事態があるからです。現在、査読者は完全なボランティア扱いです。そこで、この問題に対応するために、査読者をあらかじめ各部門で選定し、期限を定めて委嘱状による正式な依頼を行うなど、査読者としての労に報いるような取り計らいができるかと考えております。

また、投稿原稿だけでなく、委員会で特集テーマを検討し、これまで温めていた原稿を掲載する、あるいは依頼原稿として掲載させていただくといった機関誌内容についても考えております。

以上が大きな変更点です。このような対応が上手くいくかどうか、心配な点はありますが、少しでも会員の皆様に役立つ機関誌であるように運営していきたいと考えております。これらの変更点あるいは他の問題につきましても、会員の皆様の率直なご意見あるいはご要望をお願いしたいと思っております。と同時に、変わらぬご支援とご協力をよろしくお願い申しあげます。

■ 投稿論文の送付先：「編集事務局」

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場3-8-1

東京富士大学 経営学部

ビジネス心理学科 深澤伸幸研究室気付

「日本応用心理学会 機関誌編集委員会」

TEL：03-3362-1229（研究室代表：内線314）

E-mail : n-fukazawa@fuji.ac.jp

常任理事会通信

事務局だより

日本応用心理学会の入会申込書を次にご案内しますので、入会を希望する方はお申し込み下さい。
このページをコピーし必要事項を記入して、下記事務局宛までご郵送下さい。

日本応用心理学会入会申込書(正会員用)

申込年月日 (20 年 月 日)

フリガナ	推薦者(正会員)		
氏名	(印)		
ローマ字		性別	男 女
		生年月日	19 年 月 日
現住所	〒 _____		
	電話番号	()	
最終学歴	[年 月] 【在学中のものではなく、卒業あるいは中退・修了したもの】		
所属	名称		
	所在地	〒 _____	電話番号 () _____
	職名・身分		
研究領域			
メールアドレス			
備考			

●記入上の注意

- 楷書で正確に記入して下さい。
- 正会員の入会資格は、会則第4条第2項に次のように定められています。
 - 4年制以上の大学で心理学およびその隣接分野を専攻した者
 - 第1号に準じる者
 - の隣接分野とは以下の分野を指しています。
教育学、児童学、人間関係学、体育学、社会学、社会福祉学、芸術学、宗教学、医学(心身医学、精神医学、行動医学など)、看護学、経営学、認知科学(人工頭脳など)、人間工学、など。
- (1)の入会資格に該当しないと判断される場合は、備考欄に高等学校卒業後の学歴および職歴をできるだけ詳しく書いてください。(2)の第1号に準じる者と認めることができるかを判断する資料とします。記入欄が不足したときは別紙に書いて添付してください。
- 社会人学生の場合には、在学大学(大学院)名等詳細を備考欄に記入してください。
- 推薦者には、必ず、署名のうえ捺印してもらってください。
- 推薦者がいないなどの相談がある場合は、学会事務局にご連絡ください。

日本応用心理学会事務局:〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4-4-19 (株)国際文献印刷社内
電話:03-5389-6491 FAX:03-3368-2822 E-mail:jaap-post@bunken.co.jp

事務局受付〔 〕審査〔 〕本人連絡〔 〕会費納入〔 〕

広報委員会（五十音順）

委員長 藤森立男 横浜国立大学
委員 内山伊知郎 同志社大学
加藤博己 駒澤大学
田中真介 京都大学
蜂屋 真 流通科学大学
星 薫 放送大学

編集後記

応用心理学のクロスロード 4号をお届け致します。

本号の特集は、信州大学松本キャンパスにおいて開催された日本応用心理学会第78回大会となっています。9月の大会両日は晴天に恵まれ、大変盛況でした。大会委員長の内藤哲雄先生と大会スタッフの先生方に御礼申し上げます。3月に東日本大震災が発生し、東北地方を中心に甚大な被害がありました。これを受け、首藤由紀先生には「東日本大震災から学ぶ 一応用心理学への期待を込めて」についてご講演いただき、津波避難対策や原子力防災体制などの再検討の必要性を問題提起されています。また、大林裕司先生と井上孝代先生は自主企画ワークショップとして「東日本大震災における勤労者のこころの支援を考える」を企画され、勤労者に対する心の支援のあり方について話題提供されています。

最近20年間を振り返って見ると、雲仙普賢岳噴火（1991年6月）、北海道南西沖地震（1993年7月）、阪神・淡路大震災（1995年1月）、三宅島雄山噴火（2000年9月）、新潟県中越地震（2004年10月）、そして今回の東日本大震災（2011年3月）などが次々に起こっています。これら災害は過疎化と高齢化の進んだ中山間地や離島で、家屋が密集した大都市で、都県を超えた東日本で発生しており、日本列島のいたるところで起きています。いま、私たちは災害の時代に生きています。

東日本大震災から9ヶ月が経過しようとしていますが、災害復興の課題は多く、諸問題が山積しています。特に、原発事故により、目に見えない放射性物質に対する恐怖と不安が社会全体を覆っています。この恐怖と不安が「放射能がうつる」という言葉に象徴されるように福島県から転校してきた子どもたちへのいじめにつながっています。また、膨大な瓦礫処理が進まない問題があります。当初は、瓦礫処理に協力的だった自治体が放射性物質を含んでいる可能性を懸念し、瓦礫処理の受け入れを拒んでいます。さらに、東北地方の農作物に対する風評被害も起きており、これら農作物の極端な値下がりが起きています。その他、原発の汚染除去はいつ完了するのか、いつ故郷に帰れるのかなどに関する迅速で正確な情報提供がありません。このため、被災者は今後の生活について見通しが持てない状態になっています。人生を主体的に生きることができず、他人に運命を握られ、翻弄されることは無力感やむなしさを募らせ、心の安定を失わせます。被災者が本来の人生を取り戻すために、迅速で有効な復興対策の実行が日本政府に求められています。

本学会は研究・実践者集団として災害復興の諸問題に対して解決策を提言し、被災者支援のための具体策を提唱する力を保有しています。この意味で、応用心理学の果たす役割は大きいと考えています。日本の未来のために、諸先生方の実践的な研究活動を心から期待しております。

応用心理学のクロスロード Vol.4

(年2回発行)

編集・発行 日本応用心理学会

〒169-0075
東京都新宿区高田馬場4-4-19
TEL 03-5389-6491
FAX 03-3368-2822
E-mail jaap-post@bunken.co.jp
HP <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jaap/>

編集協力・製作 福村出版株式会社

デザイン 公和図書株式会社デザイン室

印刷・製本 モリモト印刷株式会社

2011年12月16日 発行

原稿募集

● 募集コーナー

- ① 「ホープ登場 クロスロードの星」
対象 応用心理学を研究中の大学院生
原稿字数 3000字以内（写真、図表を含む）
- ② 「大学探訪 研究室におじゃました」
原稿字数 4800字以内（写真、図表を含む）
- ③ 「職場探訪」
原稿字数 4800字以内（写真、図表を含む）
- ④ 「CROSSROAD ESSAY」
原稿字数 3000字以内（写真、図表を含む）
- ⑤ 「海外最新事情」
原稿字数 4800字以内（写真、図表を含む）
- ⑥ 「心理学から見たおすすめDVD紹介」
原稿字数 1300字以内（写真、図表を含む）
- ⑦ 「BOOK REVIEW 本を出しました」
対象 2011年7月～2012年7月の間に刊行分の会員の書籍（自薦・他薦は問いません）
原稿字数 430字以内
- ⑧ 「応用心理士の現場」
原稿字数 4500字以内（写真、図表を含む）

『応用心理学のクロスロード』では、皆様の原稿を募集します（執筆者の紹介・推薦も受け付けてます）。

⑨ 「その他」

本誌の感想・意見、日本応用心理学会へのメッセージなど

● 5号の原稿締切 2012年8月31日

（※6号以降に掲載させていただく場合もあります）

● 応募方法

原稿は、連絡先（住所、電話、メールアドレス、所属）を必ず明記して、お送り下さい。デジタルデータの場合はメール添付ファイルにてお送り下さい。掲載の採否については広報委員会で決定させていただきます。なお、お送りいただいた原稿は返却いたしません。予めご了承下さい。

● 送り先

[郵送]

〒240-8501 横浜市保土ヶ谷区常盤台79-4
横浜国立大学 藤森研究室 気付 日本応用心理学会
「応用心理学のクロスロード」原稿募集係

[E-mail] fujimori@ynu.ac.jp

件名に「応用心理学のクロスロード」原稿応募とお書き下さい。

夏目漱石

から読み解く
「家族心理学」読論

漱石が、現代家族の心の闇に迫る!!

亀口憲治【著】

◎2400円

四六判／並製／276頁

ISBN978-4-571-24045-4

二章 夫婦の心のもうれ
二章 単身赴任と夫婦システム

四章 父親の子育て物語
四章 妻からみた夫の子育て

家族心理学、家族療法の第一人者である著者が、夏目漱石とその家族との関係に焦点を当て、現代日本の家族が抱える心理特性、心理的問題の深部に迫る。家族心理学注目の一冊。



心理・教育のためのRによるデータ解析

服部 環（著） ◎4000円 ISBN978-4-571-20076-2

統計解析ソフトRの多変量データ解析法を、練習問題の解法を解説しながら実習的に学ぶ。R実践書の決定版!

ダイニングテーブルのミイラ セラピストが語る奇妙な臨床事例

セラピストはクライエントから何を学ぶのか

ジェフリー・A・コラー／ジョン・カールソン（編著）

岩壁茂（監訳） 門脇陽子／森田由美（訳）

◎3500円 ISBN978-4-571-24046-1

仕事に対するセラピストの真摯な姿勢と、セラピストを信頼し問題を克服しようとするクライエントの勇気の物語。

触法発達障害者への複合的支援

司法・福祉・心理・医学による連携

新刊

藤川洋子／井出浩（編著）

◎2300円 ISBN978-4-571-42404-5

触法発達障害者が社会に戻るときの受け皿は非常に乏しい。各専門分野の支援と連携の必要性を訴える1冊。

子育て支援と心理臨床 vol.4

子育て支援合同委員会（監修）

『子育て支援と心理臨床』編集委員会（編集）

◎1700円 ISBN978-4-571-24533-6

心理臨床の立場で年2回発信する専門情報誌。特集「子どもたちはいま—東日本大震災から半年を経過して」。

◎=本体価格

福村出版

〒113-0034 東京都文京区湯島2丁目14番11号
TEL 03-5812-9702 FAX 03-5812-9705
http://www.fukumura.co.jp

安全衛生活動のあらゆる場面において
手引きとして活用できる
最新のハンドブック

産業安全保健 ハンドブック

【編集委員】

圓藤吟史 河野啓子 大久保利晃 岸玲子
櫻井治彦 小木和孝 酒井一博
名古屋俊二 山田誠二

- 産業安全保健活動にかかる項目を網羅した充実の構成
- 学術界・産業界など第一線の執筆陣
- 4頁と2頁の見開きレイアウト、多数の図表・写真の挿入で読みやすく、使いやすく

2012年3月刊行

割引価格で予約申込みを受け付け中です。

割定価格 52,500円(税込み)
割引価格 42,000円(税込み)

本文体裁 A4判 総頁1,400頁
上製付録 横2段組み 索引付
DVD-ROM

【お問合せ・ご予約先】

労働科学研究所出版部

〒216-8501 川崎市宮前区菅生2-8-14
電話: 044-977-2121(代)
FAX: 044-977-7504
E-mail: shuppan@isl.or.jp
HP: http://www.isl.or.jp/

北大路書房

〒603-8303

京都市北区紫野十二坊町12-8

☎ 075-431-0361 FAX 075-431-9393

<http://www.kitaohji.com>

振替 01050-4-2083

▶価格は定価(税込み)で表示しています

ユーモア心理学ハンドブック

R. A. マーティン著 野村亮太・雨宮俊彦・丸野俊一監訳 A5上製・520頁・6090円 生理・進化・認知・言語・人格・発達・社会関係・健康など、心理学のはば全分野の研究を科学的エビデンスに基づきクリティカルに検討し、体系的に整理。教育や医療の現場でユーモアに関わる実践家にも有用な内容となっている。

現代の認知心理学4 注意と安全

日本認知心理学会監修 原田悦子・篠原一光編 A5・304頁・3780円 「注意」は、人間の認知機能全体を明らかにする可能性を秘めた研究領域と言える。本書は、注意が認知機能において果たす基礎的な役割から、高齢化やヒューマンエラーとの関係、産業・医療領域における研究まで幅広く紹介。

音楽アイデンティティ

—音楽心理学の新しいアプローチ— R. A. R. マクドナルド・D. J. ハーグリーヴズ・D. ミエル編 岡本美代子・東村知子共訳 A5・320頁・3570円 音楽は、個人の行動や態度、価値観をダイナミックに変容させる力を持つ。発達心理学、社会心理学、社会構成主義の視点から音楽と個人との相互作用を明確に示す。

現代の認知心理学7 認知の個人差

日本認知心理学会監修 箱田裕司編 A5・304頁・3780円 一般知能や情動的知性、認知の個人差にかかる進化的・遺伝的基盤や脳内機構といった基礎的テーマを手厚く論じながら、社会的認知能力、認知のエイジングなどの応用的テーマ、認知の個人差の測定法まで幅広く取り上げる。

認知心理学研究の現在を一望!

現代の認知心理学(全7巻)

日本認知心理学会 監修

第1巻 知覚と感性 三浦佳世編

第2巻 記憶と日常 太田信夫・巖島行雄編

第3巻 思考と言語 楠見孝編

第4巻 注意と安全 原田悦子・篠原一光編

第5巻 発達と学習 市川伸一編

第6巻 社会と感情 村田光二編

第7巻 認知の個人差 箱田裕司編

●各巻A5判・約350ページ・3,780円



青年期の心身の発達や学習過程に加え、今日的な課題や傾向についても取り上げ、教育方法や技術、生徒指導との関連やその基礎となるべき事項をドラマや再現シーンを用いて具体的に示し、教育心理の中核的な内容や事柄を分かりやすく解説します。

DVD カラー 各巻約30分
価格／DVD
各巻 63,000円(本体60,000円)
対象：大学、教育機関

①青年期の特徴 指導:三浦香苗(昭和女子大学教授)

青年期には身体や運動能力はもちろん内面的な精神構造にも大きな変化が生じます。その結果、文法や数学のような抽象的・論理的教科の学習が可能となり、自分を取り巻く現実や未来について批判的に考え、思考する世界も拡大します。また、大人の権威から離脱し、自立した人間になるよう努力し、新しい人間関係を構築しようとします。

大人への過渡期にある中・高校生の時期の青年の特徴について解説します。

⑥中・高校生の人格と情緒 指導:濱口佳和(筑波大学教授)

青年期には、新しい自己を求める旅に出、アイデンティティの探求を縦軸に、パーソナリティ形成も進んで行きます。人格の概念や主なパーソナリティ理論を紹介し、自己愛、主張性、攻撃性など、青年期のパーソナリティ形成にまつわるトピックを紹介します。孤独感や自己嫌悪感など、情緒的に不安定になりやすい時期でもあります。特に人恐怖心と抑うつ傾向を取り上げ青年期の感情面の問題についても解説します。

②動機づけとやる気 指導:大吉治(千葉大学准教授)

動機づけは学習に対する意欲、やる気などと言われ、どうすれば意欲がわき、やる気ができるのか、あるいは、どうして人は無気力になってしまうのか、教育心理学の中でも重要なテーマの一つです。

外発的動機づけ、内発的動機づけ、学習された無力感など動機づけに関する実験の紹介を通して、教育場面で動機づけを高めることの意味とその方法について考えてていきます。

⑦青年期の交友関係 指導:榎本淳子(東洋大学准教授)

青年期の友人関係は、親からの自立を支え、自己を獲得する過程で重要な役割を果たしています。中学生と高校生と大学生とでは、友人との関係の持ち方が異なります。その実際はどのようなものなのでしょうか。

青年期の友人関係の重要性とその機能と発達的变化を紹介しつつ、近年の友人関係の特徴についても再考し、教員は交友関係にどう関与すべきかを考えていきます。

③学習方法と評価 指導:岸学(東京学芸大学教授)

学習指導の活動をとらえるためには知識の獲得過程、学習方法、指導方法、評価方法の4つの視点からの理解が肝要です。知識の獲得過程では学習によりどのような知識・技能・態度などが獲得されるか、学習方法では学習者の視点に立った自己学習について、指導方法では指導者の視点に立った教授法と授業の実施方法について、評価方法では学習効果が上がる学習指導と評価活動について具体例を見ながら紹介します。

⑧教育とメディアの諸問題 指導:中澤潤(千葉大学教授)

マンガ、インターネット、携帯電話、テレビ等は、若者に大きな影響を与えていました。マンガを読むリテラシーについて解説し、また、正誤多様な情報が混在して提示されるテレビやインターネット等のメディアから、適切な情報を読み取るメディアリテラシーが重要なスキルであることを提示、情報を鵜呑みにするのではなく、批判的に検討することの重要性にも言及し、青年にとってのメディアとの適切な関係を考えます。

④学級の中の学習不適応 指導:桑田良子(植草学園大学教授)

学習活動の諸侧面で気になる、学習活動を円滑に進めることに困難をきたす、今後の学習に支障をきたすことが予想される生徒などを「学習不適応」生徒としてとらえ、その対応や関わり方について事例をあげて解説します。発達障害については、障害特性と認知特性を理解した対応の必要性を示します。また、「学習不適応」生徒への心理面の支援、進路問題への支援、学校体制の取り組みにも言及します。

⑨不適応と問題行動 指導:田中奈緒子(昭和女子大学准教授)

青年期の若者は身心、対人関係、社会的役割など変化の中で、両親や教師など権威との葛藤、自己評価の揺らぎなど、様々な問題を抱えます。そして、その問題は、不適応や問題行動として顕在化することがあります。非行と不登校を取り上げ、その実態を概説し、彼らの心理状況について解説します。不適応と問題行動に関する理解と支援についても考え、合わせて具体的な支援がなされている現場での声の紹介します。

⑤自分探し 指導:笠井孝久(千葉大学准教授)

中・高校生の時期は、親や社会から与えられた行動基準ではなく、自分なりの行動基準で考え行動し、社会との関係を築こうとします。さらに、身心や友人関係の変化、進路など、様々な変化や課題への対応が求められます。「自分づくり」「自分探し」をキーワードに、事例を通して、青年期の自立へ向かう心性とそれらを理解する視点、発達を支援する教育的関わりについて解説します。

⑩若者の性行動 指導:福富謙(東京学芸大学名誉教授)

第二次性徴の発現に象徴される性的成熟は、青年期の始まりを示す身体的な変化であり、青年の心理や行動に多大の影響を及ぼします。しかし、教育の場では、青年の性意識や性行動に対して抑圧的な姿勢が根強く、十分な対応がなされていないのが現状です。教師として対応をするためには、性を考える視点を自ら確立させる必要があります。

現代社会の中で性意識や性行動を考えるための枠組みを、価値観との関連を含めて解説します。